
メタルギアとひぐらしのなく頃に「蛇助け編」

転がる岩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタルギアとひぐらしのなく頃に「蛇助け編」

【Nコード】

N7041I

【作者名】

転がる岩

【あらすじ】

メタルギアとひぐらしのコラボです。

メタルギアの情報を掴んだスネークは2010年に数十年前に滅んだ雛見沢へ向かう。古手神社の祭具伝の中で見つけた秘宝を使った瞬間・・・なんと昭和58年5月にタイムスリップしてしまう。

スネークの運命は？そして圭一達は・・・？

一話 もう一つのハジマリ(前書き)

今回この物語をつくるのは大変な作業でした。

というのもMGS2しかやったことなくてWikipediaでストーリー確認からの作業でした。

ひぐらしもメタルギアも話が深いから。

ひとまずよろしくm(´`´)m

オリキャラも出すんでよろしく！

一話 もう一つのハジマリ

2010年5月12日。

俺たちは、

極秘で生物兵器搭載のメタルギアの情報をつんだ。

今振り返れば。

あんなに長い戦いになろうと思ってもいなかった。

1週間後5月19日朝10時

スネーク「こちらスネーク、雛見沢についた」

オタクコン「今回の潜入は日本の田舎町。いままでにないパターンだね」

「まったくだ。核兵器をもたない国がこんな辺鄙な場所でもとんでもない事を考えてるからな。それよりオタクコン、東京についてなにかわかったか？」

「一応まだよくわかってないけど、愛国者とかかわってる可能性は大だね」

「だろうな。・・・雷電とは連絡は？」

「・・・いやない。あれ以来ね」

一年前ビックシエルの事件後、俺と雷電はオルガの娘を救出に向かった。無事に救出に成功したものの雷電が愛国者に捕まる。救出に赴こうとの束の間、情報がつかめず時間が過ぎる。ところか、数日たつてもオルガの娘は死なない。以前聞いた話では、愛国者達に雷電が死ぬと娘も死ぬようプログラムされたはず。謎を解き明かすように後に雷電が愛国者の施設を脱走したという情報を掴んだ。

最後に見かけたのは恋人ローズとの会話だ。ローズ宅で、見かけて・・・なにやら揉めてる様子だった。そして走ってどこかへいくようです。俺は呼び止めたが「ほつといてくれ!!!」と怒鳴られる。結局見失い連絡も絶つ。ローズに事情をきくも、「今はまだ」いえない「今はまだ?時がきたら教えてくれるのか?謎は深まるばかりだ。・・・噂ではどこかで酔っ払ってるらしいが何をやってる!また過去の断片にうなされてるのか!一発ビンタでもくらわせたい所だがそれは後回しだ。」

「まあいい。奴に活を入れるのは後回しだ」

「今回も基本現地調達。ただ今回は長期になりそうだからレーションは多め調整しといたよ。それとまったく武器がないのもキツイからM9だけ用意させといたから。」

「本当に助かる。それとオタクコンあの雛見沢大災害でなくなった東京の一員だった富竹の親戚が援護にきてくれると聞いたがいつくるんだ?」

「そろそろだけど。彼も現地調達さ」

「しかしなぜ日本人の一般市民を?」

「一人くらい雛見沢に詳しくそうな人がいないと」

「訓練の経験は?」

「元自衛隊みたい。異例の早さで出世してたらしいよ」

「でもやめたのか?おれみたいだな」

「彼はある夢をおいかけたらしいよ」

「ほづ。・・・！誰だ！」麻酔銃（M9）を構える。

富竹「君がスネークかい」

「富竹か？」

「そつだよ。僕の名は富竹五郎。下の名前だよんで（ ）今回正式にはないけど形としてフィランソロピーのスネークを直にサポートしてきたよ。よろしく（）* *（）」

「よろしく（）やけに愛想がいい（）いろいろ聞きたい事は互いに山々だがひとまず行こう」

「そつだね。歩きながらも話せるし。」

こうして俺たちは目の前にある鉄格子を越えいま廃れてしまった雑見沢の土を歩み始める。

一話 写真(前書き)

ちなみに前回雷電とローズが別れそうな雰囲気だったがなぜそうなってしまったか知らない人は Wikipedia で確認してほしい。というのも雷電の墮落時代はここでの設定は数ヶ月ということになっている。いわば墮落を抜けるか否かの瀬戸際とみてほしい。ローズとの喧嘩の理由、和解は MGS4 に明らかになるのでローズとの関係は今回は回復しません。

他に物語りに矛盾をかんじたらアドバイスクださいな。バツシンググはきついんで。

ちなみに前に紹介した富竹次郎の親戚、富竹五郎は完全なオリキャラです。かなり似てますが本人でないので注意してね

二話 写真

「久しぶりの雛見沢は悪い意味で静かだ」

人がすまなければ田舎町も、のどかさというより殺風景にしか見えない。そう言いたいのが感じる。

先ほどまでの元気がなくなっておりどこか切ない様子の五郎だ。

一方スネークとしては初めて日本にきたという事もあってかどこか観光気分。しかし同時に雛見沢をヒロシマ・ナガサキに次ぐ負の遺産と見ている。

メタルギアは原爆よりもっと恐ろしい

いかんいかん観光にきたのではない。

目を覚ましてくれるようにオタコンから連絡だ。

「任務は順調かい」

「富竹五郎と合流して雛見沢を探索中だ。オタコン。今回はガセネタで、はないんだろうな」

「証拠ならあるよ」五郎が無線を聞いていたのか写真を二枚見せてくれた。

「かなり山奥にある。一般の人が登山したら迷ってしまいそうな場所だ」写真の内容は森の中にある怪しげな施設とその中をとった物。施設の中にはメタルギア・レイだ。

「よくとれたな。」

「もともとは野鳥や変わった昆虫、自然風景でもとりにきたんだけどね。でも写真をおさめたら警備していた人にみつきり殺されかけたんだ。命からがら逃げ回ってきたけど。慌ててたから場所を忘れてしまっ」

「殺されかけた？それで今回は一緒に探索ときたか。今回の装備は？」

「まあ前回は武器はないし囲まれるし大変だったよ。カメラを改造した銃なら。ソーコムピストルと性能は一緒。他にも様々な機能を搭載した富竹フラッシュユニット二号さ！」

「カメラを改造？随分ユニークなもの扱ってるな。オルガみたいな事を」「誰オルガって？」

「なに昔の話だ。きにするな」

「とりあえず頼んだよスネーク、五郎。ぼくも衛星映像で探してるから」

「アメリカから通信衛星で探索とは・・・それはご苦勞なこった」

「ちよつとスネークこつちだつて大変なんだよ」

オタクコンを皮肉りつつ俺たちは探索を続けた。

2時間後・昼食時間

「今回の任務は単純にはいかない」

「難見沢も狭そうで広いからね」

「なんとか思いだせないか？」

「なんとなく見当はあるんだけど確信はないんだ」

「ひとまず一旦わかれないか。手分けしたほうが効率いい」「そうしようか。じゃスネークはここからまっすぐいったところ、古手神社があるからその付近を僕はその反対方向にある見当している場所へ向かう。」

「わかった・・・聞こえるかオタクコン。これから別れて任務を行うかどうか？」

「いいんじゃないか。こつちも二人が探索してる所以外を通信衛星

探すよう手配するから」

こうして二人は別れようとした時だった。

「……！動くな誰だ！」

スネークはうしろをふりむきM9を構える。五郎も慌ててうしろを振り向く。

「……誰もいないじゃないかスネーク」いや確かにいたはず、いや感じたはず。五感では感じとれない本能的なものだが。スネークは鋭い本能をもってるが故に確信があった。……しかししない。

疑問を感じつつも五郎と別れた。

三話 過去の悔やみ（前書き）

メタルギアとひぐらしのコラボのわりに体の動作的なものより互いの心理描写が多くなってる感じがします。

デスノートや二十世紀少年のような心理描写を鋭く描いてるのは好きですがこの小説のメインは本来は動作的なのを重視したいので早くスネークを過去にとばしてー（笑）更にギャグやネタもふんだんに取り入れたい（笑）

この物語りは流れてきに前半は暇潰し編と皆殺し編、後半は祭囃し編を元につくってます。というのもストーリー設定には本当苦労しました。まず時代背景を無理やり一緒にしようか悩みました。がやっぱりこだわり強くタイムトラベル式でいきました。

他サイトで作られたメタルギア×ひぐらしとかぶらないよう、パクらないように独自のこだわりを貫きました。ただタイムトラベル式は他サイトにもあり、ここをどういじるかでストーリー展開の動向が当初発案してたよりも変わってきました。

ただ過去編に突入したら類似展開もやむなくできます。まあやりっはり考えることは一緒というか似てるというか。スネークをどう扱うかはこれからかきますがひぐらし×メタルギアコラボをしっちなる人はおそらくスネークがこれからどうなるか想像つくはずで

でもオリジナルを追求したいのでなにかしら面白く展開をつくっていききたいです。

三話 過去の悔やみ

五郎と別れてから10分位したあと古手神社につく。さらに少し歩いたところに雛見沢を一望できる丘のような場所についた。

あまりにいい眺めの為時間を忘れて景色を眺めていた。

「ちよつとスネークく休憩は終わった筈だよ」

オタコンから連絡だ。通信衛星とはやっかいなもんだ。

背後に人の気配がする

「誰だ！」

「ひい！わしゃあ、あやしもんじゃなかね」

そこにいたのは初老を迎えた人物だ。

「……さつきうしろにいたのはお前さんかい」

「……何のことじゃ？」

老人は訳が分からんといいたげな表情だ。

「……物騒なまねをしてすまない」

その後その老人とベンチにすわりながら軽い情報交換をした。

話しによると彼は元住民らしく大災害がおきる前に興宮に引越してたらしい。

彼の目はどこか生氣を感じられず死んだ魚のようだ。

「わしゃあこの年になって本当に後悔してることもある。」

「わしゃあこの村にいたとき本当に多くの人にひどい事をしてきた。それこそ親戚、家族関係なしにな。奴隷のごとく扱ったもんじゃ。わしのようなダラズは死ぬべきなんじゃ。」

老人は話しを続けた

「ところがふた開けよつたらこのざまじゃ。純粹な村人は皆しんでしまった。一人になったわしゃあその後長年の癖から抜け出せず裏社会で生きたんじゃが何をやってもむなししい思いしかわかんわ。まじめになりたいと堅気に身を投じてからも罪悪感はい日に強まるばかりじゃった」

「人は誰だつて目をつむりたくなるような過去がある。あんただけが特別じゃない。自分を悲観しすぎるのはよくない」

そんな事を言ったところで簡単に納得できる内容ではない。彼は遠い目で雛見沢を眺め続ける。

色々話してる内にふと気がつくところ時をまわってた。

「セミの鳴き声がきれいだな」

「ああ。これはセミじゃなかひぐらしや」

「ひぐらしってどつ違つ？」

「セミはミンミンつとつとしいんじゃが、ひぐらしはカナカナと涼しく鳴くのじゃ」

しらなかったのでセミに色々いるのだとわかった。任務がおわつたら昆虫採集でもしようか。

さて

このままダラダラするわけにはいかない。と思いつつも落ちこんでる老人が気になる。

「俺は後悔をあまり感じない性格だ。しかし・・・俺は人を殺めたことがある。それも沢山な」

「・・・!!」

驚いた様子でこちらを見る「あんたも裏の人間か？」

「俺は軍人だった。まあいまでも軍人みたいなもんだが裏で生きていると言われればあながち間違えではない。マフィアではないが」

・・・一応指名手配だしな

そうだ。シャドーモセスの英雄だ世界の英雄だといわれながらもこのぎまだ。

「だが俺は俺の信じた道を貫いてきた。これまでも。これからも」

「おんどれはつよいのう。」「なに。おれだって自分の殻に閉じこもったときもある。お互い様だ」

そうアラスカで何年もな。

話しを終えたスネークは立ち上がりはじめた。信じるものを貫くために。

「ありがとう親父さん。それじゃ施設もメタルギア自体も知らない

んだな」

「わしゃあなんもしらん。新聞もあんま見んしな」

「それじゃ」

「あ」

「どうした？」

「せっかく雛見沢にきたんじや。祭具殿に立ち寄るとええ」

「オヤシロさまってのがあるところか」

「おおよくしつちよるな」

「・・・ユメニデテキタ」

「ああん？」

「いやなんでもないありがとう」

「あと」

「まだなにか」

「こんど会うときは麻雀しよーや。安心せい勿論純粹勝負や」

「賭け事なしか。いいぜ。」

そういつてスネークは夕日を背に老人と別れをつげ祭具殿に向かう。

ひぐらしの鳴く頃に

三話 過去の悔やみ（後書き）

いかがでしょうか？ひぐらしファンならきっと「彼」の正体をわかるはず。（ヒントはダラズ）

彼とスネークが軽い情報交換の時どんな会話をしたかについては過去編についてから改めてかきます。

四話 夕日の決闘（前書き）

思っていたよりもアクセス件数があったのでおどろきました！本当にありがたい！

アクセス解析のPVとユニークつというのがよくわからないけどユニークはなんとなくわかる）。

まだまだ文章構成も未熟者ですが一人でも多く面白く思えるよう頑張ります！

四話 夕日の決闘

スネークは老人と別れた後に五郎に連絡をとる。結局何も見つけれなかったらしいが。祭司殿で待ち合わせする事になった。

午後3時45分

「お待たせスネーク。結局お互いだめだったか。」

「まあこんな目立ちそうな場所に施設は作らないと思っていたがな。・・・それより元住民の老人にあった」

「元住民の？なんて人かい？」

「自分のようなダラスは名前など名乗る資格はないそうだ」

「??誰だろう。」

「祭司殿を見とけといわれた。」

「そ、そうか。せっかくだから見る？祭司殿の中？ここは以前、ぜつたい足を踏み入れてはならない場所だったからね。興味がある。」

「聖域に足を踏み出すなど？まあそういわれると余計気になるな。」

「扉には鍵がかかっているかけどもうボロボロだから簡単に壊せるよ。」

「オタクン聞こえるか？これから祭司伝に侵入する」

スネークはオタクンから了解したと聞いて祭司伝の扉をあけようとした。

その時

「誰だ！」

「！」

怪しげなヤツらに囲まれた。灰色の作業着を着たものたちだった。六人はいる。

「囲まれたなどどうするスネーク？」

「・・・」

じりじり近い付いてくる。「手をあげる！銃を捨てろ！」

スネークは素直に従う。しかしスネークは諦めた訳ではない。

「あっ！」

スネークは視線を太陽に向ける

「何だ！どうした！」

作業着の男達は少し後ろに振り向く

「いまだ！富竹フラッシュ2！」

「ま、眩しい！？」怯んでいるうちに五郎はフラッシュモードから攻撃モードに切り替えて改造カメラで相手を倒す。

スネークCCQCを駆使して相手を一気に気絶させていく

「チクシヨオオオ！」

一人の男がスネークに向けて銃を発砲。しかしスネークは身代わり
に気絶させた男を後ろから首をしめながら楯にして身を守る。

「！」

仲間を打ってしまったことに一瞬心に迷いが起きる。

「いまだ五郎！」

見事なまでのコンビネーションで作業着の男達を一掃させる。

「大丈夫かいスネーク!? 五郎!?!」

「ああなんとか二人とも無傷だ。敵は気絶してる。まあ起き上がった戦えないように全員両腕片足の骨を折つといたがな」

「う・・・全く容赦ないね」

「命あるだけマシだ。こんなの軽い方だ。あとサプレッサー付きのAKとUSPを入れた。弾薬も大量にな」

「災い転じてなんとやら・・・てどこか」

「さあ行こうスネーク。祭具伝へ」

「・・・まだ災いは終わってなさそうだ」

「へあ?」

そういつてスネークはいきなりAKを乱射し始める。

「ちよつと!・・・!?!」

いきなり人が4、5人倒れる。

「ステルス迷彩だ! 気をつける! まだ10人位いる」

「よくみつけたね。」

「透明でも足音や影があるからな。ていつても俺の場合勘で感じたんだがな。」

「・・・(このひとなら相手がゴルゴ13でも生き延びられるかも)

「見えない相手が発砲してくる。あつという間にスネークたちは窮地にたたれる。」

「・・・スネーク今日僕たちの命日になるかもね。」

「命日？ふん、笑わせるな！核兵器の脅威が・・・メタルギアがなくなるまで俺は死なん！！いくぞ五郎！！！！！！」

「ウオオオオオ！！！！！！」

突撃を試みた瞬間

何者かが現れる。

忍者のようになっこをした奴が

「あれは！？」

そしてステルス装備をしてる透明の奴らを次々と倒してゆく。まるで人とは思えない非凡な動きで銃弾を刀で弾き返しながら斬り倒してゆく。

あっという間だった。

決闘が終わりを迎え、ひぐらしが静かに鳴く。

「・・・ひとまず礼を言う」

しかしサイボーグ忍者と言えは・・・グレイフォックス、オルガ・・・

「・・・で、今回だれなんだ？マニアックコスプレ野郎は」

「俺だ」

その男の正体は

「待たせたな。スネーク」

「雷電！！！」

四話 夕日の決闘（後書き）

さあ雷電登場！！

でもちょっと早すぎたかな？この展開は？

ずっと心理描写を中心に書いてたからいい加減フラストレーションがたまってたまって（爆）

元久この設定ではあったんですが、できるだけ雷電をもっと切り札的に使いたかったので先延ばしも考えてました。

さあいよいよ祭具殿へ。スネークは前回意味深な発言をしていたがいよいよその真相が？

五話 時のカケラ（前書き）

ケータイで打つてるとあやまってけしたりなんだりと大変です。

パソコンはネットつないてゝないためうてないし・・・

昼間なら大学のパソコンでもできるかもしれないけど。IDとかパソコンからでも大丈夫なのかな？

何はともあれ今回はいよいよストーリーが大きく動きはじめます。

五話 時のカケラ

「あれが雷電……」

驚愕するのも無理はない。異常なまでの運動神経を目の当たりにすれば当然の反応だ。

「久しぶりに会ったかと思えば……デットセルにでも入ったのか？」

「冗談キツイぞスネーク」

「一体何がお前を変えた？」

雷電は簡単に説明をした。あの時オルガの娘を助ける時に捕まっしまい体を愛国者達に滅茶苦茶に改造されてしまったことを。その後脱出に成功したもののローズと揉めてしまった事。残ったものは最強の肉体と過去の断片だった事。

「……そうだったのか」

「連絡を無視してすまない。もう一度スネークについて行きたい。それと」

「信じるものを探しに？」

「……！」

「凶星のようだな」

「信じるものは自分で探せ。それを次の世代に伝える。……あなたにそれを一年前教わった。少し前までまたおれは過去のことから逃げていた今度こそは」

「雷電。言つとくがおれは自分探しに来てる訳じゃない。これは任務だ。わかるな？ゲームじゃないぞ。それを理解したうえで答えを求めると」

「勿論だ」

「・・・わかった。こい！」

そして三人は祭具殿に入る。

「こちらスネーク。オタコン、祭具殿に侵入した。それとさっき雷電と合流した。」

「話は聞いてたよ。僕もビックリしたよ」

「オタコンすまなかつた。こちら雷電。からだはもう以前のおれじゃない。絶対に任務を成功させる」

「わかった。こっちも全力でサポートするよ」

祭具殿のなか不気味だった。おびただしい数の拷問器具の数々。その奥には

「あれがオヤシロさまか」

とてつもなくでかい像があった。まるで俺たちを見下ろしてる如くのようなのだ。

五郎はさっきから写真ばかり撮っている。

「オセロットがみたら喜びそうなものばかりだな・・・さて！」

「？」

五郎と雷電はスネークを見る。

「ここで話して起きたいことがあるんだ」

「雷電。オヤシロさまの目の前に小さな箱がないか？」

見るとたしかにある。というより供えられてる。

「あるが・・・これがどうかしたか」

「夢に出てきたんだ」

「え？」

「最近夢にな、角のが生えた可愛い女の子が雛見沢のこの場所に来いと。で、この箱の中にはあなた達を助ける力があると。最初はあまり気にしてなかったが毎晩、毎晩出てくるんだ。オカルトは信じないが俺はこれまで任務で有り得ないものも多くみてきた。」

「俺も似た夢をみた」

「何？」

「角がある女の子が・・・自分と向き合いましょって。探しましよう答えを。そして祭具殿にすればスネークに会える。いきなさいと。毎晩出てくる」

「実は僕もなんだ。」

五郎も話す。

「每晚枕元で・・・内容はスネークと一緒にたゞよ」

スネークの話しによればオタクンめ似た夢をみたらしい。

「じゃ、なんで最初からここにこなかつたんだ？」

「あくまでも施設を見つけるのが最重要任務だからな。祭具殿はあとからでもいける。とりあえず箱をあけてみる」

箱の中には説明書と宝石のような綺麗な石のかけらがあるがある。箱の内容（これは時のカケラ。これを握りしめて目をつぶり何か強い思いを抱けばあなたを助けるでしょう。なおその思い次第で周りの者も助けることができる。）という内容だ。

「どうする？スネーク？」

「どうするもこうするも」

そういつて雷電から時のカケラをとり。静かに目をつぶる

「やってみるまでだ。」

「百聞は一見に如かず・・・か」

オタクンがメイリンのまねをしてるが気にせず。

意識を集中させる。

そして

「!？」
やがて大きな光に包まれる。

時刻は午後四時三十分
ひぐらしはまだ鳴いている。

なんだこの空間は？

全員が思ったことだ。

あたりはテレビ映像のようなものがたくさんある。

「!・・・あれは!？」

スネークがみたものは、幼い頃に実の父、ビックボスに訓練をされたこと。ビックボスの陰謀を知り父と戦ってる時の映像。アラスカで殻に閉じこもってる時のこと。敵であり友だったグレイフォックスと戦い。数年後シャドーモセスでそのグレイフォックスに助けられた事。オタコンとはじめてであったこと。

雷電がみたものはソリダスにこき使われる姿。戦場でわずか10才でスモールボーイユニットの小隊長としてまたはジャック・ザ・リッパーとして殺戮を繰り返していたこと。内戦終了後、愛国者に拾われVR訓練をやらされ記憶を操作させられたこと。ローズと出会った時のこと。ソリダスと決闘したこと。体を愛国者に無理やり改造されたこと・・・酔っ払ってた頃。

五郎は大好きだった親戚の富竹次郎と野鳥撮影をしにいつているところ。

富竹の死に悲しみにくれる日々のこと。小中学時代空手で全国制覇。好きな女の子に振られて鬱になり一週間学校をサボったこと。高校時代写真部で県の優秀賞をとったこと。全国では落選したこと。自衛隊では高卒にして異例の早さで出世していたこと。

あらゆる時の思い出を目の当たりにし再び大きな光に包まれる。

五郎は目を覚ます。

「2人とも大丈夫？」

「なんとか」「問題ない」

あたり先ほど変わらない。

「なんだったんだあれは？」

「・・・とりあえず外の空気を吸おう」
オタコンから連絡が

「大丈夫かい！？連絡とれなくて心配したよ！」

「大丈夫だ。今から外に出・・・開かない。カギがかかっている。表から」

「なんだと!」

「畏か?」

「さあな。とりあえずどうする!?!」

「ウラの上の方にたしか小さな出口があったと思う。あの鎖につかまって行こう」

三人は脱出を試みる。

さつきと変わらない? いやさつき戦って気絶した連中がいない。それだけではない。

何人が遠くで畑を耕す人を見かける。先ほどまでの寂しさはなく、のどかさが感じとれる。人も僅かだがあるしてる。

「?」

2人が状況をのみこめずにいると五郎が突然血相変えて走り始めた。

「!?!」

「次郎おじさあああ ん!?!?!」

まるで子供のように泣きじゃくりながら五郎にそっくりさんに抱き

つく。

相手はなにやら困ってる様子だ。

「ちよ、ちよつとだれだい？」

「次郎さん！生き返ったんだね！」

「何を？意味わかんないよ」

〈数分後〉

「やっと落ち着いたかい？」

「はい。次郎さん」

「だから君はなぜ僕を」

「やだな」僕は成長したんですよ！あなたの親戚の五……？……！？」

やっと異変に気づいたのか。あたりを見回すと人が歩いてる。田んぼを畑を耕してる。

まさか……

「次郎さん……聞きたいことが」

「何だい？」

「今年は……」

その頃スネークたちは

「なあスネーク。どうして俺たちは草の茂みに隠れる？」

「俺達が行ったって話しがややこしくなるだけだ。様子を伺う。」

その時。五郎から体内ナノマシンの無線連絡が。

「どうした！用はすんだのか？」

「スネーク、雷電！僕たちはとんでもないことになった！！」

「とんでもない？」

「おじさんからきいたんだ！ここは昭和58年5月19日つまり・・・
・1983年5月19日、27年前の雛見沢にタイムスリップした
んだよ！」

「何だつて!？」

五話 時のカケラ（後書き）

次回はスネーク主観ではなくいよいよ圭一及び部活メンバー主観となるでしょう。

まだまだ文章構成がヘタクソですがよろしく願います！

六話 出会い（前編）（前書き）

未来はわからない

だから人は必死に生きる。

未来は変えられる

揺るがない強い意思があれば

過去は変えられない

起きた事実は白紙にできない。

過去に目を背けてはならない

逃げることは負けるより愚かだから

過去の失敗は無駄ではない

失敗は成功に繋がる

過去にこだわれば本当の未来を切り開けない

運命に負けてしまつから

でももしその過去を変えられるなら

前の世界で学んだことを

過去の教訓として生かすことは

悪いことですか？

私はただ

幸せになりたいだけ

ステル

フレデリカ・ベルンカ

六話 出会い（前編）

昭和58年5月19日4時30分

雛見沢にてコスプレ集団が歩いている。

魅音「いやー今日はすごい勝負だったね」

圭「まったくだぜ。なんだったんだ〜今日の勝負は？」

今日の部活はみんなが白熱しすぎていろんな賭け事がおきた。結果は皆勝ったり負けたり。

罰ゲームでみんなが村中大行進するはめに。俺は（前原圭一）猫耳スク水の格好を、魅音は牛柄のセクシーなビキニ姿。レナは幼稚園児の姿。沙都子はメイド服。梨花ちゃんは猫耳にナース服をきている。

いろんな村人の人たちにみられて、恥ずかしさこの上ない。

「ん？あれ？」

レナ「どうしたの圭一君？」

「カバン学校に忘れちゃった！あんどきは罰ゲームのことで頭いっぱいだったからな。俺取りに行ってくる。すぐ戻るから先いつてくれ！」

そういつて圭一は走って学校にもどる。

沙都子「それにしてもよくあの格好で一人でいけますわね。（笑）」

魅音「圭ちゃんが一番はずかし〜格好してるのにな」

梨花「あれ？あそこに富竹がいますです。」

レナ「本当だ。でも何か様子が変わだよ？だよ？」

五郎「ウワアアアアアアアン！！よかった！！本当によかった……」

富竹「ちょ、ちょっと人違いしてないか！？」

「時のカケラが……オヤシロさまが生き返らせてくれたんだ！！！」

「生き返るって……僕はゾンビか！？死んでなんかいないよ〜」

「どうしたですか？富竹さん？まさか愛人？やだ〜鷹野さんという人がいながら。しかも相手は男！？」

「ああ魅音ちゃん！ち、違う知らないひとなんだ！それにぼくはそつちの気はない！！！」

五郎はただ勘違いしたまま泣きつづけた。

〜数分後〜

「やっと落ち着いたかい？」

「はい次郎さん」……

・・・「なんだかおさつまたのかな？かな？」

「でもあのひと富竹さんにそっくりですわw」

「ん？なんかまた様子が変だよ」

「顔がみるみる青くなっていくです」

六話 出会い（前編）（後書き）

今ケ-タイでわなく学校のパソコンで作業してます。だからすこしだけしかかけませんでした。メタルギア色が強かったですがいいよひぐらしの色もできます。

しかし1話から5話までかなり文字修正&文章追加しました。色々解説も加えたので是非見てください！！

七話 出会い（後編）（前書き）

前回の前書きの詞はいかがでしたか。かなり即興でつくったのですが。

過去編に突入したらフレデリカ・ベルンカステルのことを書くことと考えてましたが何も考えてませんでした。（爆）
んで一気にして一瞬で書き上げました（爆）

今回はギャグ満載です！

七話 出会い（後編）

レナ達は富竹にソックリさんの様子を伺う。何やら状況が再び怪しくなる。

今度は一人ブツブツと独り言ごとを始め。小さくて何をいつてるかわからない。唇だけ動かしてる風にも見える。さすがに部活メンバーも若干引き気味だ。そして富竹が口を開く。

「それで結局あなたは何なんですか？」

「！」

ヤバいでしょう。五郎は言い訳を考える。勿論おじさんに会えたことは嬉しい。しかしこのままではただの精神異常者だ。周りからも冷たい視線が続く。くそ！せめて無線連絡は後にすべきだったか！

「あ・・・あつあはは。すいません。人違いでした。（^^;）あ、あははははは・・・へあ」
「なぜ僕の名を？」

「そ、それは偶然一緒だったんですよ！いや、おじさんにソックリで」

「そ、そうですね。」

魅音（・・・）「富竹のおじさま、知り合いではないの？顔ソックリだよ」

レナ「うんうん。髪の毛の色以外ソックリ」

「確かに・・・あなたと僕はソックリですね。お名前は？」

「!・・・ぼくは、と、富岡。富岡五郎だ。」

「名前までソックリだね」

「あっははは(ふう)なんとかごまかせた」

梨花「みい(まだ)お客さんが近くにいますです。」

「?」

すると梨花いきなり草の茂みが伸びきってる方に向かう。

「蛇さん(こちら)手の鳴るほう(れ)なのです。」

「!(って)この子スネーク達がいることしってるのか!?!・・・ん?
?この子梨花ちゃん?」

「誰かいるのかな?かな?」

ガサガサ

スネークたちが始める。スニークスニークとサイボーグ忍者の姿で

魅音「・・・おじさんたちだれ?」

部活メンバーと富竹は目が点の状態。無理もない。どうみても見た目もこのシュチュエーションもあやしぎる。

「・・・そのあの」

「彼の友人さ。」

スネークは雷電の変わりに言う。五郎に親指を指す

レナ「友達も変わった人達なんだね。」

レナは屈託のない笑顔でいう。結構失礼な発言をする。

魅音「おじさんたち何やってんの？」

雷電& amp ;五郎「あ、これはその」「えと・・・」

スネーク「隠れ鬼だ」

全員「・・・」

そりゃないよスネーク

「おじさんたちさ遊ぶのはいいけどももう少しマシな格好したら？そんな変態スーツきてないでさ。」

スネーク& amp ;五郎& amp ;雷電「へ、変態スーツ!？」

今日はめずらしくレナも空気を読まなかったが魅音は相変わらず。しかしこんな田舎町でのこの格好なら言われても無理もない状況だ。

スネーク「・・・それはお互い様じゃないか？（スニークキングス
ツをバカにしたのはゆるさないが）」

そう。部活メンバーも今はコスプレ状態。ましては女の子が破廉恥
極まらない。

「こ、これはちょっとした訳があつて・・・。」

スネーク「訳があるのもお互い様だ。」

一方その頃圭一は・・・

「はあはあ、早くみんなのところに戻らないと・・・。」

圭一は鞆をもつて走っていた。一人だと恥ずかしさが倍になる。

お、見えてきた。

そして圭一は大きな声で

「おおーいきたぞみんな！」

沙都子「あ、圭一さんですわ」

スネーク「!？」

なんだあの姿!？スネークの最初に圭一に感じことだ。今この場に
いる奴らは全員（富竹を除く）変態と言われてもしょうがない。

しかしあれは群を抜きん出る。間違いない。本物の変質者だ。この
ままでは彼女たちは強姦されてしまう!

スネーク「まで、動くな!!」

USPを構える。

全員「!？」

圭一「な、なんだよ!？おっさん!？」

スネーク「みんな聞け!変質者だ!奴取り押さえる!」

圭一「だからなんだよ!俺がなにをし」

しかし圭一の言葉を遮るように

スネーク「鞆を捨てろ」

圭一「へ？」

スネーク「鞆を捨てろ!!」

圭一「は、はい!」

鞆を地面におく。が、

スネーク「違う!田んぼにな!!」

圭一「!？そんなことしたら鞆やノートがぐしゃぐ
グシャ!

言葉を遮るようにUSPで圭一の足下にいるカエルを狙撃する。

スネーク「田んぼにな」

圭一「・・・はい」

バシヤリ

田んぼに投げる

スネーク「・・・いまから貴様の悪しきオツトセイを潰す」

全員「!!!?!」

スネーク「いや、切りおとそうか。いけ!雷電」

雷電「わかった!!」

魅音「ちよつとまっておじさんたち!圭ちゃんは私たちの大切な友達なの!格好はあんなだけと、怪しい人じゃないから止めて!」
スネーク& amp ;雷電「何!?!」・・・

くそしてく

圭一「まったくひどい目に遭わされたぜ。あゝあ鞆もびしょびしょ」

梨花「圭一はカワイソカワイソなのです。」

スネーク & a m p ; 雷電「本当にすまなかった！ m (| |) m

五郎は思った。まさかここにきてシャドーモセスの英雄とジャックザリッパの土下座姿をみるとは。

圭「危うく明日から前原圭子になるとこだったぜ。」
女の子になる所だといいたいのだろう。

レナ「はうゝ女の子になった圭一君もかあいよゝ」

圭「おいレナ！」

全員「ははは！」

スネーク「圭一、これは僅かだが鞆と教科書、ノートの弁償代だ」

そいつってスネークはいつのまにか持ってたのか圭一に五万円を渡す。

圭「おい！こんなにいいのかよ！これは半分以上余るぞ！」

スネーク「怖い思いもさせたしな。後それとコレを」
レーションを渡す。

圭「これは？」

スネーク「まあ弁当のようなもんだ。おいしいぞ」

圭「な、なんかわりいな」

沙都子「ところでお二人のお名前は？」

雷電「俺は・・・雷電だ」

沙都子「変わった名前ですこと。(にーにー似てますわ)*・
*()」

スネーク「俺は・・・」

どうしようか。ふと雷電をみた。

・・・そうだ

スネーク「・・・プリスキン。イロコイ・プリスキンだ。あだなは
スネークだ」

魅音「二人とも外人さん？すごいね〜日本語ペラペラで」

梨花「蛇さんも雷さんもすごいすごいのです。」

魅音「それにしてもよく大の大人が三人で怪しい格好して隠れ鬼な
んかしてるよね」

スニーキングミッションだからあながち間違いではないが何か違っ
がう。

五郎「まあ観光がてら・・・あはは」

圭一「そういえばすっかり暗くなつたな」

レナ「本当だ。もう帰ろうよ。」

こうしてみな別れて帰ることになった。

五郎「いや、危なかつたね」

スネーク「五郎、お前も少しは空気を考える」

雷電「でも大丈夫なのかスネーク？プリスキンまではいいとしてなぜわざわざ（スネーク）という単語を」

スネーク「プリスキン呼ばわりはあまり好きじゃない。どこかの国の王子さまみたいでな。たしかにビックボスつまりネイキッド・スネークは世界的有名人。だがあだなとして扱うなら心配いらん。それにあの年齢なら聞いた事程度、有名な軍人とかしか認識しないだろ。この時代のソリッドスネークはまだ実践デビューもしてないしな。ガキだからな、ちょうどさっきの長い髪の女の子くらいの」

五郎「とりあえずどうする？これから」

スネーク「祭具殿にいこう。お供え物をわすれてた。夢にでてきた女の子がいつてたんだ。助けるかわりにシュークリームをたんまりととな」

五郎「僕もみた。実は・・・雷電も？」

雷電「ああ。なんかあうあういつてたな。」

三人は祭具殿に向かいシュークリームを入ってるレーションを供える。・・・一人除いて。

スネーク「あれ」

雷電「どうした？」

スネーク「しまった。圭一にやってしまった。しょうがない。俺が今日晩御飯にしようとした激辛カレー入りのレーションを供えよう。」

お供え物を供えた後、五郎は時間を確認する。

スネーク「何時だ」

五郎「午後5時30分だよ」

その頃圭一は・・・

圭一「なんだろうな お、シュークリームだ！・・・でもなんでシュークリームなんだろう？」

??「はうあうあう〜！ダメなのが混じっているのです〜」

続
く

七話 出会い（後編）（後書き）

真面目なファンの方がみて、もしかしたら不快に思うシーンもあったかもしれませんが。一応謝ります。スイマセンm(| |) m

今回のギャグシーンは次回の伏せんに繋がる一応これでも意味ある重要な内容です。

ちなみに五郎の容姿ですが髪の毛の色は赤色です。地毛は黒ですが赤に染めてる設定です。スネークと一緒のスニークングスーツ姿です。なお紺色の帽子もかぶっています。

八話 難見沢症候群（前書き）

活動報告に詳しく理由かいてありますがこれからは2、3日に一回。最悪一週間に一回の更新になります。余裕があればうちますが毎日これだけの内容を投稿するとなれば脳みそと目がオーバーヒートしちゃうんで。

八話 難見沢症候群

午後6時

お供え物を供え終えたスネークたちは今は難見沢を一望できる丘のベンチにいる。

オタクコンと今後について話す。

「・・・ひっかかる」

「何が？」

「オタクコン。よく考えてほしい。今俺たちは27年前の日本にいる。なのになぜ無線連絡ができる？」

「・・・!!」

「いまここはまちがいでなく過去の世界だ。」

「どうなってるんだ？しかもなぜ過去の世界に飛ばす必要があるんだ？」

「過去に飛ばすことが俺たちを助ける事と何か関係が？」

「まあいずれにせよ、時の世界カケラの力じゃないのか？いま連絡ができるのも。」

「考えらるとしたらそれしかないか」

「ま、それはおいといてどうする？寝る場所は」

「俺は本当は今日施設がみつけれないなら廃屋で野宿するつもりだった。予定をかえねば」

「民宿は？」

「この格好でいくのか？」

「・・・」

「じゃあどうする？」

「時のカケラをもう一度使おう。」

「!・・・もどれるのか?」

「俺たちを助ける道具だろ?」

「そうか・・・よかった」

スネークが未来に戻ろうとしたとき。

オタクコン「そのまえスネークたちに話して起きたいことがあるんだ」
「?」

「実はさっき調べてたんだ。雛見沢について。そしたら・・・その地域にはある独特な風土病があるみたいなんだ」

「風土病?」

「そう。なんでも感染経路は空気感染らしい。その病気にはかかれば幻覚、過度な被害妄想、鬱、さらに疑心暗鬼が生じるらしい。他にも発症を高めるものとして過度なストレスな精神不安定になると生じる。」

「やつかいな病気だな。もっと早く教えてくれ。」

「すまない。」

「・・・あ!」

五郎は何か気づく。

「なあ、一つ気がかり何だけど。・・・スネーク、雷電さ、さっきの少年どんなふうに見えた?」

雷電とスネークはお互い顔をあわせ。

「そらもういかれた変質者だったろ」

「ああ俺も思った」

「姿は?表情なんか。」

「完全にいつちまっていた目つきだったな。薬物の常習犯みたいだったな」

「まったくだ。それに村を全裸であるくとは（俺もアーセナルのなかで捕まったにいたとき裸で任務したが）」

「ぜ、ぜ全裸!?・・・そうか。」
五郎は手を顔にあてる。

「スネーク、雷電。彼は、圭くんはスクール水着姿だったよ。」
「なんだって!?!」

「それに彼の表情は真つ赤な顔で半泣き状態だった」

「・・・どうゆうことだ?」

「・・・恐らくすでに感染してるかもね君たちは。さっきここに来る前戦ったときのストレス、そして過去世界にきたことでの過度の不安や緊張が原因だと」

「!」

「五郎はなぜ正常なんだ!?!」

「僕はいつもここにくる前に予防注射をうってるからね。おじさんの形見でもってたんだ。何本か注射をもってる。」

「だから落ち着いてたのか」

「まあどこごとくお笑いコントにも見えただけどwあのままオットセイを切りおとしたら大変だったね。」

「そつえばさつきから首がかゆい」
「俺もだ」

「・・・!!ふたりともかいちゃだめ!!」

「首が痒いのは何か関係が？」

「難見沢症候群はある程度すすむと首のかゆみができる。L1〜L5までであるんだけどL3あたりになると首をかゆくなるんだ。最後は死ぬまで？きつづける！」

「!?!」

「・・・オタクコン！生物兵器搭載メタルギアってまさか!？」

「たぶん、これだよ」

「・・・なんてことだ」

「でもスネーク達は特殊なのかまだ疑心暗鬼まで いつてる感じがしない。目つきも正常だし。普通は相手の信頼が高ければ高いほど、恐らしいことに信じられなくなるんだけどいまこうして話を冷静にきいてる。」

「俺たちは大丈夫なのか？」

「いやちゃんと注射すべきだね」

そういつてスネークたちに注射を渡す。

ふたりは注射を打つ。

「一部の例なんだけど・・・精神力が強い人ならキツカケ次第で克服できるらしいんだ。スネークは肉体も精神力も桁違いだからきつとある程度自我を保ってられると思うんだ。すごいよ普通ならもう

狂乱寸前なのに。スネークの場合は注射うてば完治するかもね。」

「医療による完治例は？」

「ない。スネークならあり得るかもってね。ただ雷電は不安がある。」

「なぜ？」

「たしかに強化骨格により異常なまでの強靱の肉体を手に入れた。元々強靱な体でもあった雷電だけど精神的にまだ不安があるはず。・・・バカにしてる訳じゃない。自分の胸に手を当てればわかるね？」

「強い意志をもつ。雷電は誓った。だが五郎の言うとおり雷電には弱い心を強めるにはあまりにも過去に大きなトラウマが多すぎる。故に乗り越えるべき壁も多い。」

「勿論戦う事への精神力は桁違いだが運命を抗う意思はまだ雷電には不安がある。」

「雷電。幸い君は肉体面では人間離れしてる。しばらくはなににもないかもしれないが、しっかり自分と向き合い自我を保つんだ。まだ何本かあるけど残り数少ないからね」

「・・・わかった。気をつける。」

「それと」

「まだなにか？」

「実は・・・ある人物が死ぬと一気にみんな末期症状に犯されるらしいんだ」

「誰だ？」

「わからない。たしか女王感染者がいるらしい」

「女王感染者？」

「うん。詳しくわからない。ただ女王感染者が死ぬと村が大変な事になるらしい」

「女王感染者がわからないんじゃないかな。オタクンしらべてくれないか？」

「わかったよスネーク」

「さて、話はすんだし戻ろう。いくか！」

〈未来へ〉

午後9時

〈結局廃屋と化した祭具殿で寝ることになった。オタクンと話し合い明日は過去組と未来組にふたつに別れて作業する事に。〉

雷電とスネークは過去探索へ。五郎は明朝に興宮に帰り三人分の私服とデジカメを調達し未来にと止まり引き続き探索に取りかかる。

「んでなぜ過去へ？」

「何か手がかりがあるかも知れない。それにダラダラとここだけ三人で探したしても意味がない。効率よくやった方がいい。」

「明日はついでに僕が作った手作りサイファー2機もとばすから。フィランソロピー本部とネット回線をつなげとくよ。オタコンカメラチェックよろしく」

「わかったよ。五郎。」

「それじゃおやすみ」

「・・・!!」

いきなりスネークはあぐらの状態から立ち上がる。

「どうしたんだい？」

「妙に胸騒ぎがする。・・・まさか!？」

「どうしたんだい一体!？」

「五郎!注射を!」

そういつてスネークは注射を受け取りすぐさま外へでる。

「おい！どこへいく！」

雷電と五郎も後を追う。

スネーク「はあはあ」

頼む

「はあはあ」

間に合ってくれ

「くう・・・はあはあ」

お願いだ

「どこだ！？」

死ぬな！頼む！

10分後。 雛見沢村墓地

「!!!・・・いた!」

そうスネークが探していたのは

「親父さぁん!!!」

昼にあつた老人だった。

あの生命力のカケラもない目つき、言動そして気になった首の傷・
・・・答えがでた。

・・・いや。まちがっていてくれ!

「うああああ……があああ……」
バリバリ

血を流して首をかきむしる老人。

「止める親父さん！早まるな！」

「……ヒイイ……園崎組かあ！？律子はしらんぞ！」

「何を言ってる。昼にあつた俺だ！」

「ああ……あ、あんたは」

「親父さん！しっかりしろいま助けるぞ！！」

「はあはあ……わしゃあもう手遅れじゃ……。」

ふと地面を見る。

血で一杯だった。

「わしゃあ……律子が園崎組から足を洗う時妙に怪しいと思ったんじゃ。」

「……？何をいきなり？」

「な、なぜ律子と関係があつたわしがケジメもなしに見逃してもら

えたか疑問じゃった。・・・わ、わしは最近怪しい奴らに追いかけて回され難見沢に逃げきてた。き、きつと暗殺の機会をね、ねら、ねらあぁあ
「

「無理にしゃべるな！いま変な奴らはいない！大丈夫だ！」

「わしの為に来て、く、くれ、たすけ、あ、ありがとな、な」

「親父さん・・・」

「ま、麻雀・・・できそうにないは」

「・・・」

「なああんだ」

「ん？」

「最後の願いだ名前を」

「・・・スネークだ」

「今度わしのようなダラスを見かけよったら叱りとばしてやってほしいんや。」

「わかったよ親父さん。」

「あ、ありがとな・・・スネーク」

「親父さん？おい、親父さああああん！……！！」

老人が息を引きとると同時に雷電達が来る。

5月19日午後9時20分

なぜか

ひぐらしが

悲しく鳴いてるぶつに聞こえてならなかった。

くそのころ。ある山奥く

「計画の準備はどう？」

「順調にすすんでいます。野村さま」

「そう。一カ月後、たのしみね鷹野さん？」

「ええほんと・・・早くこないかしら。」

「これからもお願いね。シャラシャーシカ」

「仰せのままに・・・」

綿流しのお祭りまで後1ヶ月。

八話 難見沢症候群（後書き）

今回は一転してシリアスでした。ひとまず第一章終了って感じですよ。
（べつに章と、つけてませんが内容的に）

九話 存在（前書き）

最近寝不足が解消され夜型から朝型生活に戻りつつあります。おもえば大変だった。脳内もクリーンに（いまだに誤字脱字あるけどね）

さて久々のメタひぐ！今回から第二章！

九話 存在

午後10時

「よし、これでいいだろう」

老人が死んだ後、スネーク達は古手神社の展望台に穴掘りをし老人を埋め即席の墓を作る。

「・・・」

「スネーク・・・」

墓を作った後スネークは墓を見もせず丘で雛見沢の景色をみてるだけだった。煙草を吸いながら。やがて三本目を口にすると、墓に近づき

「親父さん・・・」

墓の前にたつ。

「あんた何故今までいきてられたんだ？」

「？」

スネークの言わんとしていることがよめない。

「雛見沢大災害で、すくなくとも女王感染者は死んだはず」

「！」

「あなたは誰に今までいかされた？それとも誰かに利用されたのか？」
たしかに。何故老人はいきていた？彼は大災害時たまたま興宮にいたとはいえ感染者の一人のはず。
二十年以上もなげいきてた。
「あなたが昔何をやってきたのか。どんな人間だったか。俺が見に行つてやる。」

そついうとスネークはタボコを線香変わりに墓の前におく。

「あなたの謎は解いてみせる。メタルギアのありかとともに」
スネークは後ろに振り返り。
「安心しな。麻雀は必ずあんたとやる。ここにはその相手が揃つてる」

そつ言つて雷電、五郎を見る。

深夜2時・祭具殿

雷電はある夢を見ていた。

「雷電起きろ」

「・・・誰だ。」

「私だ」

「・・・大佐！いや大佐の形をしたAI！？」

「何を言ってる雷電。寝ぼけてる場合か！さあ雛見沢での任務に戻れ」

「ふざけるな！だれがお前の言うことなど」

「上官に向かって態度がなつとらん。お前は戦場の駒だ。私に従えばよい」

「俺は政府や誰かの道具じゃない！」

「君は他人の口先の真似事しかできるのか？」

「く・・・！」

「さあ任務へもどれ。シュミレーションを完遂するんだ」

「・・・おい」

「何？」

「うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！
うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！
うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！うるさい！

スネーク「雷電どうしたんだ！？起きろ！！」

「はっ！・・・夢？」

「かなりうなされてたぞ。大丈夫か？」

「ああなんとか今は何時？」

「8時だ」

「少し寝過ぎた？」

「だいな」

「それよりスネーク。なぜ上半身裸？」

「みてわからないか？筋トレしてたんだよ。」

スネークはずっと祭具殿の屋根でケンスイと階段登りをしてたらしい。

「もうすぐ五郎がくる飯をすませろ」

その後、五郎と合流し私服とデジカメを渡される。ちなみに下は迷彩服、上はジャージだ。スネークは紺色、雷電は水色のジャージだ。

「ところでなぜ私服？」

「また変態扱いされるよりましだろ？」

オタコンから連絡が

「こちらスネーク」

「おはようスネーク。女王感染者の件んだけど・・・詳しいデータがみつからないんだ。どうやら資料は全部は焚書されたらしい。」

「証拠隠滅か？」

「そうだ。ネット上でもいろいろハッキングして情報を調べたんだけどダメだ。」

「だとしたらなおさら過去世界に行く必要性がある」

「うん。そこでなんだけど・・・僕も雛見沢に行くよ。過去の」

「なんだって！？正気か！？」

「スネーク達みたいにスニッキングをやるわけじゃない。スネークたちに情報を提供するためのアシスタント。聞き込み調査をするんだ。」

「随分地道だな。しかし俺たちでもそれは」「スネーク達は聞き込みよりも探索を中心なやつてくれないか？そつちのほうは効率もいい。」

「わかった。オタクン気をつける」

「念のためスタンガンを所持する。今日は準備するから明日あたりにそつちにいく」

「それまでだれがサポートを」

「メイリンとキャンベル大佐がやってくれる事になった」

「懐かしいな今ふたりは」

「大佐なら今いるよ。変わる？」

「久しぶりだなスネーク」

「・・・大佐！」

「今回の君の任務は聞いた。大変そうだな。」

「大佐紹介したい仲間がいる」

「ああそれも聞いていますまず帽子を被ってるのが富竹五郎だな」

「はいよろしくお願いします。」

「髪が長いのが・・・たしか雷電か？」

「・・・」

スネーク「雷電！いまいる大佐はお前の脳にいるAIではない。本物だ」

「君のビックシエルでの活躍は聞いている。期待してるぞ！」

「あ、ああ。よろしく。」

「それじゃオタクン。たのむ。注射わすれるなよ」

「わかってるよ」

こうしてスネーク、雷電は過去世界へ、五郎は残り探索へむかう。

雷電が心の奥で大佐に不審を抱いている事に気づかずに

5月20日午前9時

75

（雛見沢分校）

「新しい教員募集？」

「そうだ。さすがに知恵先生だけじゃ大変だろう。この海江田が教えたいところだが経理でいそがしい。そこでこのチラシを雛見沢、興宮に配るんじゃない」

「だれかステキな先生がくるといいですね」

「ああ大丈夫！きつとくるよ！我が分校に新しい風をふいてくれる何か」

九話 存在（後書き）

雷電ははたして心の葛藤にかてるか!?

つづく

十話 信頼と情報（前書き）

今回からいよいよ過去編本格的に始まりです。

十話 信頼と情報

5月23日午後5時

あれからスネークとオタクンは合流し過去世界を回った。しかし過去でも未来でも何も情報をつかめず悶々としていた。

「いつまでもここに居るわけにいかないのに……」

「雷電何かみつかつたか？」

「いや……何も」

「クソ！」

今三人はまわりが田んぼの土手にすわりやすんでる。

「この村の人たちは疎外感があつてどうもよそ者をよく思わないらしいんだ」

スネークがタバコを吸う。

「信頼がなければ情報がえられない……か」

「……！それだよ！スネーク！雷電！」

「？」

「この村に引っ越しをするんだ！」

「何をバカな！」「ずっととはいわない。ほんのメタルギアを破壊するまでだよ」

「そつはいつでもな」

「就活をこの村でやれと？」

「うん。」

「しかしなあ……」

三人が途方に暮れてるとある人物が近づくとある人物が近づく。

「きみたちちよつといいかい」

坊主頭に髭面のなにやらガタイのよい人物が近づく。

「君たちなにやらお困りの様子だね。……就活という単語を使つてたね。もしよければ教員にならないかい？」

そしてなにやら名刺を渡される。

「雛見沢分校。校長・海江田だ。」

そう言つて勧誘のチラシを渡される。

「我が分校は教員がふたりしかいない。試験は面接のみで大丈夫だ。どうか頼む。午後3時半から午後6時までなら学校でいつでも待ってる！」

そつといい残して去る。

「なんか一方的だな」

「でも、スネーク。きみなら教員でも良いんじゃない。」
スネークはIQが180もある。語学は六カ国を話せる。

「俺が教師？バカバカしい雷電お前がやれ」

「おれは勉強は得意じゃない」

「オタクコンは？おまえなら大学もでてるし理科と数学英語も教えられる。教師にふさわしい」

「勉強面はね。ただスネークの方がいい先生になれそうだけどね。なにか勉強以外の大切な事を伝えられそう」

「つまり俺に教師になれと」「そうゆうこと」

「フン・・・ヤレヤレ」

「じゃスネークはきまりだね。よかつたじゃないか。学校だしいろいろ情報も入るんじゃないか以外と」

「オタクコンたちはどうする」

「僕たちは・・・グ」

言葉を言いかけたときに腹の音になる。

「ちよつと早いけどご飯たべない？」

くエンジェルモートく

「おいオタクコンいくらレーションが飽きたといってこんなところでたべなくても」

「歩きだから地味に遠いし」

「そう言うなって2人とも一度きてみたかつたんだよ！」

「でもまあいい目の包容だ」

「性欲を持って余す！」

「スネーク、・・・自重しな」

「お前がいうな！」そしてメイドさんがオーダーをとり近づぐ。

「いらっしやいませ。ご注文は？」

「お前はたしか魅音じゃないか！」

「知ってるの？この子？」

「オタコンしらなかったっけ？」

「そうか。時のカケラの力でも過去の雛見沢だから通信衛星の映像がみれないからわからないんだよな。音や声しか。」

「あの〜あたし魅音じゃないんです。詩音なんです。双子の妹です。」

「双子？あいつ双子の姉だったのか」

「はい学校は違つんですけど。」

「それにしてもそっくりだな」

〈食後〉

詩音「あの〜そこの金髪の方お願いが」

雷電「俺か？なんだ？」

「店長が及びなんです」

店長「どうも。あなたこのエンジェルモートで執事として働きませんか」

「執事!?!」

「そうそう、うちはかわいい子はそろってるけど故に男性客が多くて女性客が少ないんだ。そこであなたのような人を探してた!どうか」

「いいぞ。かまわない」

「本当ですか?それでは後日また面接にきてください」

スネーク「よかったな雷電。また一つ情報網がふえた。」

そしてスネークたちは帰る。

「後はオタコンか。」

「僕はもういききたい場所は決まってる」

「どこ?」

「入江診療所つてとこなんだ」

「診療所?お前は機械技術専門だろう。」

「確かに僕は専門からずれてる。でも事務仕事ならできる。それにこの時代にはない医療器械を僕なら造れるし。」

「なるほどいい考えだ」

「それと・・・診療所の責任者が僕にソックリらしいんだ」

「ソックリ?」

「うん。村人に結構間違えられて。」

「オタクンにソツクリな奴がいるとはここも変わった土地だ」
「まあ、あってみなきゃわからないけどね」

「オタクンそういえばスーツないか？面接でつかいたいんだが」

「大佐が使ってた緑色の仕官服なら」

「仕官服？そんなものなぜ」

大佐から連絡がくる

「もってけば役にたつと思って渡しといた」

「なるほど。役にたつた礼をいう」

「これくらい大丈夫だ」

午後九時半

〈園崎家〉

チリリリン、ガチャ

「はい園崎です。あ、詩音」「ねえお姉、聞いてくださいよ！今日
エンジェルモートに監督と悟史くんソツクリさんのお客さんがきた
の！」

「へえ〜！！監督と悟史にねえ」

「まあ悟史くんに似てるって言うても外人さんだし彼と比べると体
つきがよすぎるんですけどね。それと悟史くんにてる人が今度う
ちで働くかもしれないんです」

「なにかすごいことになったね！あれ？あたしも外人さんで悟史に似たガタイ良い人最近見たかも」

「お姉本当！？」

「うん、なんか三人くらいで変態スーツ来て隠れ鬼してたよ。」

「へ、変態スーツ！？隠れ鬼！？」

「うん、悟史に似た人は忍者みたいな格好してたかな」

「でも忍者になった悟史くんかつこいいかも・・・」

「とりあえず今度部活メンバーでいくよ！」

十話 信頼と情報（後書き）

最近MGS1、3、4をやりたいと思うこの頃。4はP3買わないと。（、、）

いきなりですが結構MGSはニコニコでいじられてることがこの間わかった。ww

某有名アニメのキャラソンとスネーク声のコラボレーションはすごかった。

十一話 教師（前書き）

今回からしばらく五郎の存在が薄くなりすが消すわけでないので注意！

十一話 教師

5月24日夕方

今スネークは面接をうけてる。

「ふむふむ、教師になる前は軍隊にいて、今は仕事をやめ難見沢に休暇中と。大学は出てないが、IQテストが180。六カ国語を話せると・・・」

書類に目を通す海江田。

「うむ、これだけの学力で大学に出てないのが不思議なくらいだ。」

そして面接が終わりを迎え退室しようとしたときだった。

「失礼しました。」

「ああ、それと」

「なにか？」

校長の言葉は驚きの内容だった。

「随分と上手い偽装教員免許だね」

「!？」

「大体大学も出ず、どうやってとったか・・・疑問だったが」

驚いた。オタクンの作る偽装物は信頼が高い。バレるなど初めてに近い。

いくら面接だけとはいえ教員免許がないとやはりだめだからな。

「・・・」

「だが、」

「？」

「採用しよう。きみを」

「!」

校長が放った言葉は意外な物だった。

「こんな細工をするのも訳があるんだろう?」

「・・・ああ」

「君は何か分校を変えてくれそんな気がする。だからok」

「ほ、本当か」

こうして俺はあっさりと許可を得た。ただ教師としてというよりは非常勤講師としての扱いらしい。さすがに偽装のままではまずいので。

「こちらスネーク合格したぞ。あしたから勤務だ」

話によれば雷電もオタクコンもうまくいったようだ。

オタクコンの行った人江診療所の責任者は噂通りソックリだったらしい。

・・・趣味のほうでも意気投合したとか。

現代に残る五郎は特に異常がみられず。

「ただいま」

おもえばこの言葉をまた使う日がくるとは

今俺たちは長屋に住んでる。三人ならまだしも場合によっては五郎も加入する事もある。まったく、男だらけとは汗臭い環境だ。

「次の日」

知恵「よろしくお願いします。プリスキン先生」

「ああよろしく」

知恵「では教室へ」

それにしてもこの離見沢は格別な別嬪が多い。大人から子供まで。今後少し楽しみだ。

そんな事を考えながら教室のドアを開ける。

「！」

なんだこの違和感！

スネークはドアを引いたが体を前に動かさない。そしたら黒板消しが落ちてくる。下には縄が。

「イタズラ？いやトラップ!？」

更に教室に入っても墨汁があつたりしたが難なくよけた。が今度はボールやらなにやらとんでくる。

「ふん、甘い!?!」

スネークはまるで映画に出てくるマトリックスのように華麗によける。

全員「おお、すごい」

「北条のトラップを」

「よけきれた！」

スネーク「今のは誰の仕業だ!？」

沙都子「・・・私ですわ。」「・・・。」

「怒るなりなんなりご自由になさいましてよ(ぶたれる!)」

「いや・・・いいセンスだ。」

そう言っつて沙都子の頭を撫でる

「!」

「だが演出が派手すぎる。もう少しスマートになればよりトラップがかかり易くなる」

「あ、ありがとうございますわ」

知恵「まったく北条さんは。あれほどトラップはダメといってるのに。プリスキン先生すいません。」

「何、いい挨拶だ。気にしない。」

知恵「は、はい皆さん。今日は新しい先生を紹介します。非常勤講師のイロコイ・プリスキン先生です!」

「イロコイ・プリスキンだ。好きな者は煙草、蛇だ。嫌いなものはハリネズミ。みんなはスネークと呼んでくれ。以上だ。」

知恵「プリスキン先生は英語と体育を教えてください。」

ザワザワ

「スゴイ外人さんだ」

「おっきいな！」

みんながざわめく。しかもっと驚いてる人物達がいる。

圭「あゝゝ！！あの時のオッサン！！」

魅音「アルエ？変態スーツのおじさん？」

レナ「本当だ。でも今日は軍人さんみたいな格好だよ、だよ？」

圭「あれじゃ、教師というか教官だな。それが一昔前の独裁者にも見える」

梨花「蛇さんは軍人さんなのです。にぱー」

スネークは今日も仕官服。斜めになってるベレー帽もかぶったまま。

知恵「あれ？前原くんたち、プリスキン先生をご存知で？」

圭「ああ、前にちよっと色々あって。」

魅音「圭ちゃん危うく女の子になるところだったよね（＾＾）」

圭「おい！魅音！ここであの話はやめろ！」

レナ「魅ちゃん・・・少しは空気読もう。」

知恵「まあ何があつたかはしりませんが・・・。せつかくだから一時限目は自己紹介をしましょう。質問もかねて。」

（一時限目）

岡村「先生は好きな食べ物は何ですか？」

「カロリーメイト、即席ラーメン、蛇だ」

全員「へ、蛇!？」

「ああ、ほかにもザリガニやサーモン、シロクマなんかも好きだな。」

魅音「ありや相当なアウトドアマニア？いやサバゲーマニアかな？」
圭「一体どんな生活してたんだよ？」

梨花「みー。蛇さんは共食いしてる、悪い子悪い子なのです。」

富田「先生、もうちょっとまともな食べ物たべないんですか？」

「ほかには一般的なのは寿司、馬刺、後カレーかな？」

知恵「プリスキン先生！よくいいました！素晴らしい!!」

「！な、なんだ!？（この異様なテンション）」

圭「スネーク先生、ありや知恵先生のポイント高めたな」
レナ「運がいいんだねスネーク先生は」

知恵「ほかには」

沙都子「スネーク先生は何人ですか？」

「国籍上はアメリカだ。……っていつてもイギリス人と日本人の
ハーフだが」

全員「へ〜ハーフなんだ。スゴイ。」

圭「スネーク先生はなぜ教師を？」

「スネークで大丈夫だ。あまり詳しい理由は言えないが軍隊を訳あ
つてやめた。休暇中にたまたま難見沢にきたとき海江田校長に誘わ
れて」

圭「なるほど。サンキュー！スネーク」

魅音「先生は軍隊にいたとき階級はどれくらいだったの？」

「……中尉かな」

魅音「へ〜すごいじゃん！武器はなにが得意なの？」

「銃器は何でも得意だ。まあもっぱらUSP、AKだが」

魅音「AKか。ロシア製のマシンガンだけ？あたしもAKあつか
えるんだけど、こんど色々な武器の使い方教えてよ！PSG1とか
さ」

「まかせとけ！」

レナ「先生は何で軍隊に入ってたんですか？怖くなかったのかな、かな？」

「恐怖感のない戦争はない。ただ俺は自分の意志で戦ってきた。・
・未来の為に銃をにぎっていた。」

レナ「未来のために・・・？戦争は破壊しかうまないような。」

「戦争はたしかに破壊をうむ。だが破壊しなければ守れない物もある。例えば破壊の矛先を誤る者、歪んだ思想、理念のある者。そいつらをくい止めるのが俺の役目だった。まあ今は訳あって除隊したんだがな。」

レナ「はう、スネーク先生はヒーローみたいだね。」

圭「ああ、なんか格好良いぜ！」

「俺はヒーローなんかじゃない。英雄なんて大抵ろくでもないやつらばかりさ。」

しかしそんなスネークが格好よく見えたのかみんなのテンションが上がる。

梨花「スネークの宝物はなんですか？」

「段ボール箱、それとドラム缶」

全員「段ボール、ドラム缶!？」

魅音「せ、先生なんでそんなもの？」

レナ「段ボールかあいかな？・・・かな？」

さすがにレナも共感できずにいる。

「段ボールをなめるな！」

全員「！」

「段ボールはな、おれたちの命をだな・・・」

その後スネークは段ボールとドラム缶をあつくかたる。まるでカレ
ーをバカにされたときの知恵先生だ。

「・・・という訳だわかったか！諸君！」

全員「はい！」

なぜかみな敬礼してる。

圭一「り、理解できねーよ」

レナ「（今日の帰りダム工事現場跡でドラム缶と段ボールさがそっ
かな、かな）」

圭一は内心レナが新たな領域にいかないか心配している。無論予感
はずれていないようすだ。

こうしてスネークの質問大会はまだまだおわらない。

その後

（午後4時エンジェルモート）

店長「今日からあたらしい人がきたよ！」

雷電「執事のJ・雷電だ」

全員「変わった名前。でも格好いい・・・（*´、*）」

詩音「ようこそ雷電さん。いやビツク悟史くん（*ハ―ハ*）」

「ビツク悟史？」

「あたしの大切な人に似てるんで。大きいからビツク悟史くん」

「はあ・・・そんなに似てる？」

「はい。顔もクールなところとかも。草食系じゃないところぐらいじゃないですかね似てないのは」

「そうか（そのうちあってみたい）」

こうして雷電も執事として働くことになった。

十一話 教師（後書き）

ちみなJ・雷電のJはジャックのJからとりました。

MGS4ではもう自分はジャックではないとってたのでかつてに名前を付け足しました。

前はMGSをやりたいといいましたがひぐらし祭もやりたいです。
Wiiの大乱闘もやりたいし・・・

まあいま忙しくて後、約一年はできない。

関係ないけど私髪をきりました。

前まで雷電いや、オセロットみたいだったけど今はスネークみたいになりました。さっぱりしましたがやはりさみしい。

十二話 園崎家（前書き）

気がついたらアクセスが一万を超えてました。本当にありがとうございます
ございますm() () m

これからもヨロシク！

十二話 園崎家

5月26日日午後10時

2時限目

今スネークは圭一たちに授業で英語を教える

「このスペルはこっちの単語と間違えやすい。気をつける。」

レナ「スネーク先生は教え方うまくい」

圭一「す、すぐレベルがまるでちがう・・・なんだか自分が勉強教えるのがいかに下手だったかよくわかる。」

圭一はよくレナや魅音に勉強を教えていた。しかしIQ180の前には歯がたたない。

魅音「おじさんもおかげでいつもよりよく理解できるよ」

魅音は特技が豊富だがどうも勉強だけは苦手だった。しかしスネークのお陰かいつもよりスムーズに理解を示している。

スネーク「・・・」

スネークは少し考え事をしている。

・・・園崎魅音か

〈回想〉

昨日

5月25日10時

2時限目

結局一時限目は質問タイムの嵐になり教室のメンバーの自己紹介はしていない。そのため2時限目に先延ばしされる。

「前原圭一。改めてだけどよろしくなスネーク」

「ああ、このあいだはすまなかったな。ヨロシク」

知恵「では次の人」

「園崎魅音！ヨロシクねスネーク！」

「……？」

園崎……だと？

たしか親父さんが死ぬ前に園崎組がどうかと。何か関係があるのか。

大佐から連絡が

「大佐。園崎という名字」

「ああたぶんそうだろう。」

「この女の子にあの事件と何か関係が!？」

「わからん。だが要注意人物だ。しつかりマークしとけ。」

「わかった!」

スネークがなぜそこまで老人の自殺の件に真剣なのか。雛見沢大災害の時、雛見沢症候群の女王感染症は災害に巻き込まれ死亡したはず。どうやって二十年以上も生き延びたのか。あるいはあの老人自身に女王感染症?

いやそのはずはない。女王と名乗る程だ。女性にちがいない。

魅音「・・・先生?大丈夫?」

いかん、いまは自己紹介中だ。

大佐「すまないスネーク。授業にもどりたまえ」
プツン

スネーク「ああ、いやすまない。ヨロシク。」

〈回想終わり〉

スネーク「(園崎魅音。どう情報を探ろうか)」

魅音「スネーク先生？どうしたの？（デジャブ？）」

「あ、いやちよつとなその」

魅音「あゝわかった。さてはおじさんの美貌に見とれたな？」

「・・・ああ、そうだ。」

圭一& amp; レナ& amp; 魅「!!」

「スタイルいいし、美人だしな。その長い髪もいい。結構タイプだぞ。」

これはウソではない。中学生にしては身長も胸もある。このまま私服で町を歩けば大人と間違えてしまいそうなほどのスタイルだ。

ボン！と音がする

「ちよ、ちよちよちよ、そ、そんないきなりストレートに言わなくても！お、おじさん恥ずかしいよ！」

魅音は顔が真っ赤だ

レナ「あゝ魅ーちゃん顔真っ赤だ。」

圭一「おいおいそんなに照れるなよ」

魅「だ、だ、だっっていきなり！」

レナ「はうー！恥かせる魅ーちゃんかぁいいよー！おもちかえりー！」

見かけによらずそつちの方面はシャイなんだな。もつとガサツかとおもってたとスネークは感じる。

圭一「いつそスネーク先生と結婚しちゃえよ！」

魅「な、なにいつてんの！あたしはいや！」

スネーク「・・・」

ハッキリとした拒絶。少しだけスネークはショックを受ける。

スネーク「（・・・まあ俺は生まれたときから生殖機能を人口的に奪われているからかまわないが）」

スネークは元から生殖機能を奪われているため性欲もない。さすがにこの空気ではそんなリアルな話をしないが。

しかし、女性には興味がそれなりにあるらしく性欲がないという表現はいまいち要領を得ない。

魅「確かにスネーク先生は格好いいけど、あたしには！あたしには・・・」

チヲ

圭一を見る

レナ「魅一ちゃん・・・」

圭一「お？なんだ魅音。好きな人いんのか」

魅音「な、なにいつてんの！！へ、べつにあたしはい、いないよ！圭ちゃんのバカ！！」

そういいながらも魅音はまたチラツと圭一を見る。

スネーク「……(なるほど)」

スネークはなんとなく理解した。魅音が恋愛には弱く、圭一はすこく鈍感ということを。

知恵「ほらそこ、うるさいですよ」

レナ& amp・魅音& amp・圭一「スイマセン」

スネーク「(やはりこんな女の子が本当に……いやこの子の家系がああ事件に関与してるのか……)」
スネークは色んな疑問があったが今は信頼を築く事を最優先にした。情報集めはそれからだと気持ちを切りかえる。

信頼……か。

あの男、ビツクボスもかつての師匠とジャングルで信頼関係に色々あって大変だったそうだ。どうゆう理由にせよ教師としての任務、いや義務もしっかり果たさねばな。

くその頃く

十時半。エンジェルモート

詩音「あ、ビック悟史くんおはようございます」

雷電「おはよう詩音」

どうやら俺のあだ名は完全にビック悟史になったようだ。雷電はそう思った。

その時だった。

ガンガン！

詩音「あら、やっちゃった・・・(デジャブ?)」

詩音は誤って店の前にならんでるバイクをけり倒す。するとなにやらガラの悪い連中が近づいてきた。

不良A「何じゃおんどれは!？」

B「何すんじゃわれ?」

詩音「ごめんなさい。本当にスイマセン。」

C「誤ればすむとおもってんかい?」

詩音「だから誤って・・・」

A「誤ってすんだらサツはいらねーよ!おつ!?!」

ブチ

詩音がキレた

詩音「・・・あんた達がケーサツって言葉いえたこと？」

B「ああ！？なんじゃその態度？」

C「やんのか？おお！」

詩音「私は園崎家の者・・・どうなってもしらないよ！」
詩音がスタンガンを構える。

A「上等じゃボケ！」

雷電「まて詩音」

詩音「雷電さんはひっこんでて！」

雷電「俺に任せろ」

そういつて前にでる

A「なんじゃお前？」

雷電「あの子も誤ってるじゃないか。許してやらないか？」

B「邪魔じゃー!!」

そういつて不良は殴りかかる。

しかし雷電が殴られる前に

B「!?!」不良の顔を驚づかみにして片手で持ち上げる。高々と。

B「な、なんじゃ、やめ」

c「おのれー!」

そういつてもう一人木刀で雷電の頭部を殴る

詩音「雷電さん!?!」

しかし

雷電は全く効いている様子がない。

c「な!?!」

a「こ、こいつバケモンか!?!」

そういつて不良aはナイフを出す。

雷電「違う」

そして雷電こんどは不良bを離してガードレールをつかみ。

ゴゴゴ、ゴボ!

不良全員「!!!!!!」

根っこからひっこぬき、もちあげる。

雷電「死をおそれていないだけだ!」

不良全員「ヒ、ヒヒヒイ! チクショウ覚えてる!」不良はバイクで逃げ去る。

詩音は唾然としてる。

雷電「大丈夫か? 詩音」

詩音「え、ええなんとか。ありがとございます。ビック悟史くん」

雷電「良かった」

そういつて雷電は詩音の頭を撫でる。

詩音「!」

雷電「あ、いやだったか?」

詩音「・・・いや全然。むしろ・・・」

雷電「?」

詩音「……やっぱり悟史くんにソックリです。」

雷電「そ、そうか。」

詩音「こんなにたくましくはないですけどね。」

雷電のひっこぬいたガードレールをみて言う。

雷電「ところで園崎家ってそんなに有名なのか？」

詩音「ええそうです。この辺では御三家と呼ばれる地元の権力者がいるんです。その中でも園崎家は一番権力があります。私が学校休んでも単位を取れるのはこのお陰」

雷電「園崎家は何やってるんだ？」

詩音「企業、商業中心に。とくにここ興宮を中心にやっています。まあ本家は基本的にヤクザやってるんですけどね。」

雷電「ジャパニーズ・マフィア？」

詩音「そうゆうことです。ちなみにお姉は次期党首」

雷電「以外だ。詩音も魅音もそんなふうにはとてもみえない。」

詩音「あ、でも園崎家は悪い人達にみえて根っこはいい人多いから。(鬼ばば以外は)……もしかしてびびってます？」

雷電「いや！そんなことない！」

詩音「よかった。さすがビック悟史くんはわかる人ねえ」

雷電「・・・モットナンバイモ、コワイトコロデスンデタカラナ」

小声でいう。

詩音「え？」

雷電「いや何でもない。気にするな。」

御三家に園崎家が

一応スネーク達と・・・大佐に伝えるか。

十二話 園崎家（後書き）

詩音と魅音だったらどっちがいいでしょうか？僕は魅音です。総合的にはレナだけだ。

関係ないけど、先日T o L o v eの単行本をみました。やっぱりラはかわいい！

あれ？やっぱり魅音みたいなスタイルいい人が好みなのかな？

男としての憧れはやっぱりスネークです！強靱な肉体、強い意志をもつ男の中の男です。

自分は体力はそれなりに自信ありますが（色々スポーツやってたんで）どうも喧嘩は弱く（x|x;x;）格闘向きではないな・・・。
喧嘩なんて高校以来やってないけど格闘センスがほしい！！

十三話 崇り（前書き）

いや〜やっと投稿できました。最近忙しくて。

まちがって一回文章を全部消したときはブチきれましたけどね。なんとか十三話をかけました。

十三話 祟り

26日午後8時・家

男三人で借家は暑苦しい。スネークは今上半身裸でいる。

オタコン「それで大佐からきいたけど雷電。この難見沢には御三家というのが事実上権力をもっているんだね？」

雷電「ああ、詩音から聞いた。」

スネーク「そして園崎家はその中でも一番権力をもっている。そうするとあの親父さんの事件もますます園崎家が怪しいとみえる」

雷電「老人の自殺に追い込んだやつらがメタルギアの件と関係が？」

スネーク「ありえる。言い方をかえるなら以前、親父さんとやつらはメタルギアに関わっているかもしれない。」

オタコン「そしてもっとほりさげるなら愛国者と東京、園崎家は絡んでると」

スネーク「まああくまで仮説だがな。」

オタコン「僕は思うんだ。彼が延命したのは何らかの組織が彼を利用し何かの実験体にしたんじゃないか？」

スネーク「実験体？」

オタコン「そう。何らかの治療法を見つけて彼に対生物兵器の実験体になったんじゃない」

スネーク「良くそんなことをおもいつく」

オタコン「でもそう考えないと辻褄があわない。勿論仮説だから絶対ではないけど。」

雷電「東京、園崎家、愛国者・・・」

スネーク「どこにいても面倒な組織がいるもんだ」

五郎から連絡が入る

五郎「こちら五郎」

スネーク「何かみつけたか？」

五郎「山奥で・・・大きな空き地を見た。後で写真をおくる。」

雷電「空き地！？山奥に？」

五郎「ああ。不気味なくらいしずかだなにもないただのさちだ。」

スネーク「方角は？」

五郎「園崎家のずくと裏の山奥のあたりにある」

オタコン「とりあえず五郎は大佐から指示を。僕達も後でそっちの時代にいつてみてくるよ」

五郎「了解。」

くそれから一段落話が終わりスネークがある話を持ちかける。

スネーク「実は明日、土曜日に圭一やレナ達に難見沢を案内をしてもらうことになった。お前たちも一応どうだ？」

雷電「まあ明日はバイト休みだし。」

オタコン「信頼を得るにはもってこいな機会だね。」

次の日

27日・土曜日

圭一「お、スネークきたな」

レナ「先生おはようございます！」

「
スネーク「おう！」

圭一「あれ？脇にいる人達は？」

スネーク「ああ、俺の友人さ。一緒に雛見沢にきた」

雷電「やあ、圭一」

圭一「この間の金髪の人？」

雷電「ああ、そうだ。俺は雷電。この間はすまなかった。」

圭一「もういいよ気にしてないし。隣の人は監督??」

オタクコン「ああ、僕は入江じゃない。ハル・エメリッリさ。あだ名はオタクコン。ヨロシク圭一」

圭「ヨロシク、エメリツリ！」

オタコン「僕のことにはオタコンで呼んでほしいな。本名よりあだ名がいいんだ」

圭「わかったよオタコン」

レナ「オタコンさんヨロシクね！」

こうして待ち合わせの古手神社に向かう。

古手神社

レナ「みんなお待ちせ」

レナが沙都子、梨花、魅音、詩音に挨拶する。

魅「お、きたきたレナ！圭ちゃん！スネーク先生！」

沙都子「あれ、まだだれかいますわ？」

梨花「みー。雷さんに入江のソックリさんです。」

詩「あ、ビック悟史くんじゃないですか！」

スネーク「ビック・・・悟史？」

雷電「ああ、なんでも悟史っていう奴に似てるらしい」

スネーク「ビック・・・何かひっかかるあだ名だな」

圭「なんでだスネーク？」

スネーク「ビックって名前の奴には色々因縁があつてな」

圭「？」魅音達にあったスネークたちはひとまずビニールシートを敷き昼食を食べる。

レナ「レナの特製弁当だよ！」

魅音「うわ〜すごいね〜」

圭一「ハンバーグいただき！」

沙都子「そのハンバーグはわたしませんわ！」

沙都子は圭一に肘うちをくらわす。

圭一「ごおお!？」

バタ

圭一が倒れる

圭一「沙都子!！」

魅音「ははは、若いつていいね〜」

レナ「まだまだいっぱいあるからね」

スネーク「こんなおいしい物、久しぶりだ！」

雷電「ああ。なんていうか懐かしいというか優しいというか」

オタコン「暖かい・・・食事だよね」

しみじみと感慨深く感じる三人だった。無理もない。壮絶な人生を長く歩んだ三人だからこそレナの料理がより暖かく感じる。もっともそのレナもスネーク達にも近くとも遠からず暗い過去があることはこの時はまだ知らない。

魅音「ところで脇にいる監督に似てる人は？」

スネーク「ああ彼はオタクン。親友さ」

オタクン「よろしくみんな。入江診療所で事務をやってる」

沙都子「コレから診療所いくときはややこしくて何かとやっかいになりそうですわ」

梨花「入江が分身なのです。にぱー」

詩音「そういえばお姉、あの富竹さんに似てる人はどうしたんですか。あたし、すぐくみたいんですけど」魅「それが最近見かけなくてさ。スネーク知ってる？」

スネーク「彼は・・・今は仕事で難見沢にはいない」

魅「あーそうなんだ。残念だね詩音」

詩音「まあいいですよ。悟史くんに似てる人がいるし」

魅音「たしかに似てるね、顔も雰囲気も。でかすぎるけど」

沙都子「ビク・ビク・・・にーにーですわ」

詩音「ビク・悟史くんハイ、あ〜ん」

沙都子「ビク・にーにーからあげですわよ!」

雷電「・・・」

雷電ははずかしそうに食べ物を食べさせられる。

オタクコン「お、なんだかモテモテだね雷電」

雷電「べ、別に・・・」

レナ「雷電さん顔が赤いよ？」

雷電「・・・」

スネーク「まだまだ青いな雷電」

雷電「お、おいスネーク・・・」

梨花「雷さんは悟史にてシャイなのです。にぱー」

圭「（悟史ってこんな感じなんだな。）」

スネーク「・・・なあ圭」

圭「ん？」

スネーク「雛見沢は本当に平和で・・・いい場所だ」

圭「だろ？俺も大好きだ。この場所は何にもないけど都会にはないあじがあるんだ」

本当に滅んでしまうのか？スネークは疑問だった。こんなにもしばらくらしい場所？

そもそも火山性の硫黄ガスが夜中に発生して滅びるなんておかしなはなしだ。

何か違う原因が？
メタルギアとなにか関係が？

圭一「スネーク大丈夫か？」

スネーク「いや大丈夫だ」〈午後四時半〉

スネーク「今日はありがとう。雛見沢の地理がよくわかった！」

魅「そりゃよかった。おじさんも楽しかったよ！」

こうしてスネークは魅音達とわかれた。

レナ「ねえスネーク先生、圭一くん、行きたい所があるんだけど」

圭一「なんだまたゴミ山か？」

レナ「ゴミじゃないよ。宝の山だもん」
スネーク「ゴミ山？」

〈ダム跡地〉

レナ「うわああ。宝の山だあ。今日はなにがあるかな　ワクワク。
(^o^)(o」

レナはあっという間にいってしまっ。

スネーク「なあ圭一。彼女はなぜこんなゴミ山を宝と?」

圭一「さあな、かあいい者でも探してるじゃ?ぬいぐるみとか」

スネーク「リサイクルつてわけか」

圭一「そうだな。レナのかあいい物は幅広いからな。それこそぬいぐるみからごはんのジャーまで」

スネーク「ジャー?所で圭一ここは一体・・・」

圭一「ここはダム建設跡地。昔ここにダム戦争つてのがあったらしいんだ」

スネーク「昔つて、お前元々この住人じゃ?」

圭一「俺は今月の頭にきたんだ東京から。スネークと大差はない。

レナも去年きたばかりなんだ。生まれは雛見沢らしいけど」

スネーク「そうだったのか。ダム戦争つてのは?」

富竹「四年前に国の方針でダム建設の発表があつてね、この村を湖の底にしずめようとしたんだ。」

圭一「富竹さん!」

スネーク「富竹!」

うしろから富竹が現れる。

富竹「その際、雛見沢の村人が一致団結して国と戦つたんだよ。話によればただのデモでなく武力行使も用いたらしいよ。大人から子供まで」

スネーク「そんなことがこの村に」

雷電「……何か他人事にきこえない。」

オタコン「どこの国もカオスって訳だね。」

富竹さん「……そんな事をちょうど一週間前にも圭一くんにも話したよね」

スネーク「そうなのか圭一？」

圭一「ああ。それと……」

富竹「それじゃこれ以上男がいても邪魔になるし退散するかな」

圭一「あ、富竹さん……」

スネーク「圭一、まだなにか」

圭一「……」

圭一の表情が暗くなる。

スネーク「？」

圭一「頭おかしく思うかもしれないけど聞いてくれるか？」

スネーク「ああ、大丈夫だ。」

圭一「この村にはオヤシロさまってのが奉られてるのは？」

スネーク「知ってる」

圭一「四年前から……綿流しの日になるとだれかが必ず死んで、だれかが必ず失踪するんだ。それをオヤシロさまの祟りと……」

スネーク「祟り？意味もなしにか？」

圭一「狙われる対象は大体決まってる。村にとって邪魔な者や村八分にされてる奴らしいんだ。」

スネーク「……」

圭一「スネーク・・・」

スネーク「まあそうゆう話は慣れてる」

圭一「あと・・・」

スネーク「まだなにか？」 圭一「なぜかレナや魅音もこのことについて話してくれないんだ」

スネーク「秘密にされてる？」

圭一「ああ、なんでおれだけ・・・魅音はともかく去年きたばかりのレナまで」

圭一は不満な表情を浮かべる

スネーク「・・・彼女達に何があったかは知らない。ただこれだけはいっておく。仲間でも時には秘密にしなければ、いや秘密にしたことだってある」

圭一「・・・仲間に隠しごとは！」

スネーク「お前はどうか？」

圭一「・・・！」

スネーク「・・・いいか、真実を求めるのは結構だ。だが最後は自分の信念をどうつらぬくかが大事だ。そこにどんな答えが待ち受けてようとな。」

圭一「・・・信念？」

スネーク「そうだ。」

圭一「なあ俺の信念って」

スネーク「自分で考える！」

圭「え……」

スネーク「……いや、もうお前にはもうその答えがわかってるはずだ」

圭「答え……」

スネーク「あとは言葉にすることができれば合格だ」

圭「俺の……答え」

スネーク「いいか、これは俺が教員として最後の任務を終えるまでの宿題だ。」

圭「宿題……」

スネーク「それと、仲間を信じる。」

圭「な、仲間はしんじてるさ」

スネーク「仲間が誤った道に走りそうならお前の信念で仲間を救え！自分の身がどうなると！男たる……！」

圭「……！」

圭「は驚いた。」

まさかスネークに仲間への疑心暗鬼が多少あったことを悟られてしまったことを。

スネーク「俺ぐらいになればお前の考えぐらいわかる。」

雷電「圭一、お前の気持ちはよくわかる。俺もある組織に洗脳されかけた事がある」

圭一「雷電……」

雷電「だがスネークは洗脳から俺を救ってくれた。スネークを信じる！」

ひぐらしがなく頃に。

ひとりの少年は、夕日と鳴き声を聞きながら仲間を信じ支えることを強く決意した。

〈ダム現場跡地・裏〉

梨花「これで鬼隠しの惨劇が回避って所ね。あたしの出番はなし……」

？「ソリッドスネーク、やはり強い意志を持った人です。彼と圭一が存在が他の惨劇を止める一番大きなカギになるハズです。」

梨花「そうね。あとは雷電が大暴れしないようになんとかしないと。」

・・・」

？「雷電も惨劇を食い止めるカギです。・・・ただあの世界の雷電は綿流し・目明し編の詩音の何十倍もひどいものでした・・・」

梨花「そうね・・・今回も絶対起こさせない。雷滅し（らいほろぼし）編だけは・・・」

（午後8時・家）

スネーク「オタコン、何を見てる？」

オタコン「この時代の週刊誌さ」

スネーク「なにか気になる記事あるか？」

オタコン「・・・悪いニュースなら」

スネーク「悪いニュース？」

オタコン「モデルガン乱射事件。去年に東京である少年が児童に向けての発砲事件が多発。市内は騒然。後に両親とともに自首。男子生徒は普段は真面目で非常に優秀な成績をのこしてたと。」

もうひとつも去年4月に女子中学生が学校でガラスをバットで割りまくる。3人殴られる。幸いにも打撲の負傷ですむ。女子中学生は普段はやさしく、おしとやかで素直な女の子と……。」

雷電「日本は治安がいいんじゃない……?」

オタク「世界が酷すぎるだけだよ。それでも日本はマシな方なんだ。信じられないけど……。」

スネーク「いつの世も、どこの世界もカオスって訳か……。」

十三話 崇り（後書き）

メタルギアのテーマソングを動画サイトでよく聞きますがかっこよすぎる！この小説を見ながら聴くとなお盛り上がる・・・！個人的にはMGS3のテーマソングが一番好きです。使命感がなぜかできて鳥肌が立ちます。スネークイーターも格好いい。

さあ雷電は以前の世界でなにをやらかしたのでしょうか？

そしてスネーク達と部活メンバーはこれからどうなるでしょうか？

十四話 オヤシロ様（前書き）

更新遅れました（|| || ;）（前回も同じ事をいいましたが）

今週はストーリー構成の見直しをしました。というのも最終回までの内容はできてますが色々と話がごちゃごちゃして混乱していたのでメモ用紙で簡単に1からまとめていました。おかげでいつもよりもスムーズに作業が이었습니다。

でも予定では金曜日には14話は完成してました。

・・・金曜日の飲み会で二時間に渡る一気飲み飲み大会（瓶をラッパ飲み）さえしなければ（爆）

メンバーに負けたくなくてつい・・・

調子に乗りすぎてました。スイマセンm（|| ||）m

僕はちなみなにビールよりもワイン派です。梨花ちゃんと気が合いそうだ（笑）

十四話 オヤシロ様

午後9時

スネーク達は寝ていた。

そして暗闇の中オタクコンが話しかける。

オタクコン「ねえスネーク、雷電」

雷電& a m p ;スネーク「ん？」

オタクコン「今回のミッションはさすがに僕ですら理解できない。謎が多すぎる。頭がどうにかなっちゃいそうだよ」

スネーク「全くだ。厄介事にはなれてるが今回は次元が異なる」

雷電「・・・あの古手梨花の言うことは本当なのか？」

スネーク「さあな、だが今は信じるしかない。でなければあの時俺達が草むらで隠れていた事がすぐにわかる訳もない。」

初めて会う相手に蛇なんて言葉を普通失礼だし使わないハズ。

オタクコン「彼女は・・・いや、彼女達はいったい」

スネーク「オタクコン」

オタコン「なに？」

スネーク「・・・いや、なんでも」

スネーク「（・・・あの雑誌にかいてる事件の犯人まさか・・・）」

（回想）

午後5時半

圭一「スネーク・・・今日はなんかありがとう。」

スネーク「なに、気にするな。」

レナ「今日はありがとう！スネーク先生！オタコンさん！雷電さん！」

圭一との会話をしたあと無理やりかぁいい物探しをレナに手伝わされた。

スネーク「お前達は先に帰ってる。・・・ちよつと俺たちは調べた
いことが」

圭一「？・・・そ、そうか」

レナ「……そつか。じゃ、また明日」

二人と別れる

スネーク「今、なんかレナの様子がおかしかったな」

オタクン「そう?」

スネーク「あの表情はまるで人を疑う時の目だ」

雷電「……」

オタクン「それよりどうしたのスネーク。こんな場所でメタルギアの調査でも」

スネーク「違う」

オタクン「え?」

スネークは後ろを振り向く

スネーク「誰だ。さっきから」

オタクン & amp; 雷電「!?!」

梨花「……」

梨花が物陰から姿を姿を現す。

梨花「スネークは鋭いのです。パチパチなのです。」

スネーク「盗み聞きするとはいい趣味をもったもんだ」

梨花「蛇さんに皮肉られましたのです。」

スネーク「まあちょうどいい梨花にも聞きたいことがあった」

梨花「みい？」

スネーク「お前、メタルギアをしってるか？」

雷電& amp; オタコン「!?なにいつてる!」「まだ子供だぞ」

梨花「全くしらないのです。どうしてそんなこと僕にきくのですか？」

スネーク「さあな……だが俺の勘が怪しいと言ってる。梨花、お

前は他の子供となにか違う。」

スネークの勘は恐ろしい程鋭い。オタコンも雷電もそれはよくわかる。

梨花「スネークが何をいいたいかわかりませんのです」

スネーク「……」

梨花「……でも僕もスネークにお願いしたい事があります」

スネーク「？」すると梨花の様子が、いや雰囲気が変わる。

梨花「わたしたちに協力してくれるかしら？……」

梨花がいきなり大人びた話し方に変わる。

雷電& amp; オタコン「!？」

雷電達は驚く。がスネークは以前として冷静だ。

スネーク「フン、やっと化けの皮をはがしたな」

梨花「いやな言い方ね・・・あなたちに全て話すわ・・・100年の惨劇を」

スネーク「100年の・・・惨劇？」

梨花は全てを打ち明ける。

雛見沢症候群の存在。

自分が女王感染者であること。

北条家と園崎家の複雑な関係。

御三家の事。

雛見沢症候群にかかった園崎詩音が魅音になりすまし次々と殺戮を始めること。悟史のこと。

他にも鬼隠し、祟殺し、罪滅し編・・・

そして数年前、祭囃し編でやっと惨劇の黒幕に勝った事。

・・・しかしなぜかまた昭和58年にいること。

梨花「・・・以上が私の経験した100年。」

オタクン「し、信じられない・・・」

雷電「何度も恐怖に怯えていたのか」

梨花「そして数年前黒幕を倒した私たちは初めて勝利した・・・」

スネーク「・・・」

梨花「でもなぜか綿流しのお祭り最中あたりから記憶がないの」

スネーク「なんだって!？」

梨花「お祭りのとき・・・とても恐ろしい事が起きた気がする。記憶は曖昧だけど。」

梨花「結局私たちはその後も立ち向かったけどダメだった。・・・そこで決心したの。惨劇を回避するには大きな力ギがもう一つ必要・・・圭一だけじゃダメだと。ならば強い助っ人をイレギュラーの存在を求めたの」

スネーク「イレギュラーの存在?」

梨花「そう・・・オヤシロさまにたのんだの。」

スネーク「あの雛見沢で奉られてる?」

梨花「そうよ。あなた達もみたはずよ夢の中で」

全員「！」

雷電「・・・あの夢の中にいた女の子？」

梨花「そう、彼女こそ雛見沢に崇められるオヤシロ様・・・そんなふうに見えないだろうけど。時の時空を越えあなた達の活躍をオヤシロさまはみていた。」

スネーク「それでおれたちが一役かわされるはめに？フン、ついぶん強引な神だな？」

梨花「その後あなたとともに何年も戦った・・・運命を抗うために、しかし」

スネーク「しかし？」

梨花の声が一層暗くなる。

梨花「・・・負けてしまうの」

スネーク「何だって？」

梨花「勝負に負けてしまうの。雛見沢やみんなを闇に陥れる組織に・・・」

スネーク「その組織とやらの正体は・・・？」

梨花「ダメなの思い出せない。オヤシロさまの力も昔より衰えてき

てしまつて・・・最近なんかも前の雛見沢の記憶が半分しか覚えてないの。私もオヤシロ様も」

スネーク「・・・俺も殺されるのか？その組織に？」

梨花「・・・ごめんなさい。これもハツキリとは思ひ出せないの。」

スネーク「・・・」

梨花「ただ、一つだけいえるとしたら・・・覚えてる限りではあるけどあなただけは死なない。」

スネーク「・・・俺だけが？オタコンや雷電は？」

梨花「・・・」

梨花は口を嚙む。

梨花「勿論覚えてる限りだし記憶も曖昧。あたしが生きてるまでの話だからその後、どうなったかまでは把握してないわ」

スネーク「そうか・・・。だが黒幕は大体検討がつく」

梨花「・・・！だれなの！？」

スネーク「お前にいってもわかるはずがないが愛国者という組織が怪しいな」

梨花「愛国者？わからないわ。」

スネーク「だろうな。それと・・・」

梨花「それと？」

スネーク「東京という組織が愛国者と絡んでると聞いたが」

梨花「・・・！東京を知ってるの!？」

スネーク「ああ、詳しくはしらんがな」

梨花のこの反応をみる限り俺たちは前の雛見沢の時にここまで互いに情報交換していないとみる。・・・もともと肝心の梨花が前の世界の記憶が曖昧だから話しても忘れてるのかもしれないが。

梨花「東京に限ってそれはないわ!！」

梨花が凄い剣幕でいう。

スネーク「なぜそう思う」

梨花「東京には直属の特殊部隊の山狗があるの」

スネーク「山狗？」

梨花「そう。山狗のメンバーには富竹もいる。富竹は表向きはフリーのカメラマン。でも本当の正体は東京の人間なの。山狗は女王感染者の私を古手家をまもってくれる組織でもあるの」

スネーク「なら一つ聞きたいことがある。どうしてそれ程の戦力を
用いながら身を滅ぼす？」

梨花「……！」

スネーク「答えられないか？フン、まあ記憶にないことあれこれい
つたってしょうがない。証拠も確信もないしな」

梨花「……」

梨花はだいぶ納得いかないといったげな表情だ。

スネーク「なんだ怒ってるのか？まあそう膨れるな。それより聞き
たいことが……」

梨花「……なにかしら」

スネーク「梨花の隣にいるのは幽霊なのか？」

梨花「……羽入が見えるの！？」

スネーク「羽入っていいのか。夢に出てきたぞ。その子は」

雷電「え、まさか」

オタクン「オヤシロ様の正体はこの女の子!？」

梨花「……ええそうよ。ね、羽入?」

羽入「……いつから僕がみえてましたか?」

スネーク「俺が雛見沢分校にきたときからだ。最初はクラスで浮いてるだけの女の子かと……。だがよくみたら夢にでてきた女の子だった。梨花。お前には遅かれ早かれ聞こうと思ってた」

梨花「そうだったの……。クビはかゆくないの?」

スネーク「例の注射なら打った。だから大丈夫だ。前の世界では羽入は見えなかったのか?」

梨花「ごめんなさい。記憶が曖昧で……」

スネーク「フン、またか……。所で雷電とオタクンも見えるのか?」

雷電「いや」

オタクン「僕たちは見えないよ。」

スネーク「そうか・・・なあオヤシロ様とやら」

羽入「あう？」

スネーク「カレー・・・美味しかったか？」

羽入は凄く落ち込んだ表情に。梨花はなぜか怪しく微笑んでいる。

羽入「あうあう！あれほどシュークリームっていったのに！」

スネーク「なんだ甘党だったのか。すまないな。こっちも色々あったな」

梨花「・・・（あれは面白かったわ。途中なぜか知恵がいて、おいしそうに見てくるもんだからあげちゃったけど）」

雷電「・・・（本当にあんな子供が？）」

オタクン「あはは、子供で甘党の神様とは、かわいいもんだね」

見えないが夢で羽入を覚えてるのか各々が想像を膨らます。

雷電「所で」

羽入「？」

雷電「時間を自由に調節できるのだろ？それだけの力があるなら難見沢を救う簡単に助けられるんじゃない？」

スネーク「雷電。そこには色々と事情があるだろ」

雷電「事情？」

羽入「僕があんまり現実世界に手を出しすぎるのはやはり立場上、倫理的に問題があります。時間を調節するだけで精一杯です。」

スネーク「神のポリシーといったところか？」

羽入「確かに僕はこの村の守り神。でもあまり手を出しすぎるのは人間の為ではありません。それに・・・」

スネーク「？」

羽入「梨花もいいましたが元々僕の力は限界があります。なんでもできる訳ではないのです。」

スネークはオタクコンや雷電に見えない羽入の言葉を翻訳する。

雷電「なんだよそれ！時間が動かせるならまだなにかできるだろ！
役立たずもいいところだ！」

オタクコン「雷電！！それは言い過ぎだよ！！」

スネーク「そうだぞ雷電！」

羽入「あう・・・」

スネーク「羽入が神かどうかは俺としてはどうでもいい。ただ目の前にいるのが羽入。それだけでいい。人ならざる存在だな」

羽入「スネーク・・・」

スネーク「話を元にもどそう。メタルギアは知らないんだ？・・・
いや記憶にはない？」

梨花「ええないわ。」

トゥルル、トゥルル

大佐から無線連絡が

スネーク「待つてる梨花。・・・こちらスネーク。大佐どうした」

大佐「スネーク。話は全部きいた。信じられない内容だが。ひとまず彼女たちに協力しよう。」

スネーク「俺たちが惨劇を回避するのを手伝えとでも？」

大佐「ああ。それにもしかしたらメタルギアのありかもみつかるかもしれないぞ」

スネーク「随分想像力豊かだな大佐。了解。まあ言われなくとも協力するつもりだったかな」

大佐「大人の義務だからな。子供をまもるのも」

スネーク「勘違いするな大佐。俺は別に義務とか正義をふりかざしたり、ましてはヒーロー気取りでいるわけではない。・・・ただ自分の意志で戦う。俺が協力したいからする。それだけだ」

大佐「相変わらずだなスネークは。健闘を祈る！」

ブツン

スネーク「またせたな。大丈夫だ梨花、協力しよう。」

梨花「スネーク・・・今回もありがとなのです」

梨花はいつもの敬語口調に戻る。

梨花「それと」

スネーク「なんだ」

梨花はこっそり耳元でささやく。

梨花「・・・雷電をしつかりはげましてあげてください。」

スネーク「何が言いたい？」

梨花「どんなに真面目な人でも雛見沢症候群は人を平気で異常な殺人者に変える力があります。どうか発症しないようにサポートしてください。」

スネーク「ああ」

梨花「ここだけの話です。雷電は違う前の雛見沢で詩音よりひどい残虐行為・・・いや大虐殺を起こした事があります。」

スネーク「!？」

梨花「彼には決して言わないようにしてください。いまの彼だと色々大きなショックがでると思います」

スネーク「・・・」

梨花「もし危ない感じになったら僕か、入江に相談してください。」

スネーク「・・・了解した」

スネークはうなずいた後、後ろを向く

雷電「スネーク、梨花は何を？」

スネーク「……お前の事が格好いいだと」

雷電「……？」

場面は変わって

～深夜～

スネークたちは寝てる。

～

？「久しぶりだなジャック。」

雷電「お前は？」

？「私を忘れたか？私はソリダスだ！」

雷電「バカな！倒したハズ・・・」

大佐「雷電、ソリダスを倒せ！ローズさんとオルガの子供がどうなつてもいいのか！？」

雷電「お前はA.I.！？また俺を騙そうと」

大佐「騙してなどない！さあふたりの命がかかっているぞ」

スネーク「オルガの方とはかく・・・ローズはどうでもいい」

ローズ「なんでそんなことこのジャック？」

雷電「ローズ！！お前今更なにしに」

ローズ「あなたに誤解を聞いてもらいたくて」

大佐「ローズに構ってる場合か！雷電早くソリダス倒せ！シュミレーションを完遂しろ！」

ソリダス「ジャック。互いに自由になるべきだよな？さあいい！」

雷電「・・・」

大佐「どうした？早く任務を果たせ！」

雷電「どいつもこいつも・・・俺をこげにしやがって!!!」

ローズ「!?!」

大佐「雷電!?!」

雷電「オワアアアア!!!」

スネーク「止める雷電!落ち着け!!!」

雷電「・・・は!スネーク?」

夢から覚める。

雷電はオタコンやスネークに向かって刀を振り落としていた。スネークは刀をAKで受け止める。

スネーク「・・・(これは早めに相談すべきなのか?)」

十四話 オヤシロ様（後書き）

最近おもったんだが前書きと後書きの部分がブログみたいになってるよくな・・・。

ま、いつか。

気がついたらお気に入り登録者が増えてました。

ひぐらしにせよMGSにせよ、もうブームから去りつつあるにも関わらずこうして読者がいることは本当にありがたい。

まして文章構成もとくに全然素人なのでよくここまでアクセスが伸びたとおもった。

一応伝えときますが僕が目指してるのは（読みやすく）、（わかりやすく）、（躍動感満載） というのを目指してます。

あまりにも本格的になってしまつとややこしくなるので。（自分が小説慣れしてないだけかもしれないが）

小説自体は大学に入学してから読む機会がふえたため（八割が携帯小説）おそらくコアな小説ファンから見ればまだ未熟な点が満載かと思えます。

動作表現がうまくできませんがもしもアドバイスあったらなにか下さいな。

次回はデットセルのあの男が・・・

十五話 デス・パーティー（前編）（前書き）

今回は早めに投稿できました。いつまた忙しくなるかわからないから投稿します。

今回はメタルギア色が強く、久しぶりに戦闘あります。

十五話 デス・パーティー（前編）

翌日

5月28日午前10時

今朝は雷電の身を案じ、診療所に向かう。

しかし診療所によったが日曜日の為お休みだった。

五郎から注射を受け取りも考えたがあまり数少ないし、無駄に使いたくない。

雷電の状態に不安はあったが基本的に落ち着いているのでこのまま任務を続ける。

スネーク「五郎あとどれくらい歩くんだった？」

五郎「三十分位かな」

今スネーク達は未来の世界に戻り先日五郎が発見した巨大な空き地に向かっている。

トゥルルトゥルル

スネーク「こちらスネーク」

オタコン「任務は順調かい？」

スネーク「まだ現地についていない。」

オタコン「・・・雷電は？」

スネーク「状態は安定している。心配ない。」

オタコン「そうかよかった。」

今オタコンは過去世界からスネーク達をサポートしている。

今日は雷電のことを配慮して戦闘以外はサポートはキャンベル大佐でなくオタコンに任している。

オタコン「がんばって！スネーク！」

スネーク「了解！」

プツン

五郎「いや〜最近ずっと単独任務だったから寂しかったよ〜！僕も過去世界にまた生きたいよ」

スネーク「おいおい遊びに来てるんじゃないんだ。少なくとも現代の調査を終えるまで過去世界に行く機会はないぞ」

トゥルルルトゥルルル

また無線が入る。

スネーク「今度は誰だ？」

メイリン「久しぶりスネーク！時間旅行はどう？」

スネーク「メイリンか！おいおいこれは任務だ。別に旅行に来たわけじゃ・・・」

メイリン「いくなああたしも行きたい」

スネーク「・・・ハア」

メイリン「何よ文句あるの？あなただって任務中でもエッチなことばかり考えてるくせに！」

まったく、どいつもこいつも・・・あきれれるスネークだが半分本当のことなのでなにも言い返せない。

スネーク「・・・で、用件は？」

メイリン「用件はね、中国のことわざで・・・」

スネーク「おいおいまたことわざか？」

メイリン「話は最後まで聞きなさい！呉越同舟という言葉があるの。」

スネーク「で、それで」

メイリン「仲の悪いもの同士が同じ境遇、場所にいるって事よ」

スネーク「・・・大佐と雷電の事をいつてるのか？」

スネークは周りに聞こえないように、小声で言う。

メイリン「まあ当てはまるけど・・・そっちじゃないわよ。敵も案外すぐ近くにいるかもって言いたいの。」

スネーク「フン、あれだけ探し回ってか？」

メイリン「それは互いに見つからないようにしてるからよ。ダンボール大好きのスネークならわかると思うけど蓋をあけたらすぐ近くにいたなんてさらにあったでしょう？互いに。」

スネーク「・・・なる程。灯台下暗しと言った所か」

メイリン「あ、スネークがことわざなんて珍しい！」

メイリンはなぜか嬉しそうな声になる。

スネーク「・・・お陰様でな」

シャドーモセスの時も散々ことわざを覚えさせられた為、ことわざ

がいやでも敏感になってしまったスネークだった。

メイリン「そういう事だから任務気をつけてね！雷電と五郎にも宜しくね！」

スネーク「了解した！」

ブツン

スネークは雷電、五郎に一応伝える。

〈三十分後〉

おおきな広場が見えてくる。

五郎「ふう、やっとついたかな？」

雷電「綺麗に調整された空き地だな」

スネーク「不気味な程、巨大な土地だな」

トウルルトウルル

スネーク「オタコン聞こえるか？ついたぞ」

オタクン「よし、任務に取りかかってくれ。気をつけて！」

スネーク達は広場での調査を開始する。

しかしスネークはある異変に気づく

スネーク「……？」

雷電「どうしたスネーク？」

スネーク「……いや。なんか歩きづらくないか？」

雷電「そういえば……ただの石ころじゃないか？」

五郎「でも目立った石ころなんて落ちてないよ？」

ビク

スネーク「……！（何だ？）」

スネークは悪寒がしたのか肩を強ばらせる。

スネーク「……まさか……！」

雷電&五郎「？」

スネーク「雷電、五郎！今すぐ逃げる！！森の茂みに走れ！」

雷電と五郎は訳がわからないといたげな表情に。

スネークは言い終わるか終わらないかわからないが大佐から連絡が

トウルルトウルル

大佐「おい、スネーク、五郎、・・・雷電！！今すぐそこから離れるんだ！急げ！急ぐんだ！！」

二人とも訳がわからないと思いつつとにかく森に向かって走り出す。

その時だった。

ドゴオオオオン！！！！！！！！！！

全員「！！！！！！！！！！」

凄まじい破壊音が響く。

（広場前の森の中）

スネーク「はあはあ・・・無事か？」

五郎「なんとか・・・」

スネークはともかく、五郎達は一步遅れて逃げていたため間に合うか不安だった。

しかし雷電に背負わされて助かる。

五郎「ありがとう雷電」

雷電「気にするな。・・・しかしあれはいつたい」

スネーク「・・・地雷探知機を見る」

二人は地雷探知機を使う

五郎&雷電「な、なんだこれは!!!!」

広場中にまばらにいやらしく爆弾が設置されてる。

トゥルルトゥルル

大佐が脇から無線を入れる。

大佐「あそこに仕掛けられていたのはC4爆弾。破壊力をみるにあらは大型とみる。」

スネーク「ただの大型じゃない。ステルス装備の最新式のものだ。破壊性も大型といえどあまりに凄まじい。一個の破壊力にしては威力も桁が違う。」

幸いスネークたちがいた付近にはあまり仕掛けられてなかったが一個の爆発で相当な威力だった。密集地帯なら今頃助かってるかどうかわからない。

雷電「クレイモアじゃなくてよかった・・・」

スネーク「いやクレイモアよりたちが悪いかもしれんぞ」

雷電「え？」

スネーク「考えて見る。普通はステルスのクレイモアのほうが手動

式のC4と違い足で踏めば一発で吹っ飛ぶ。だが、わざわざ手動型爆弾を利用する。この意味がわかるか？」

雷電「敵がすぐ近くにいる!？」

スネーク「・・・」

雷電が言い終わる前にスネークは上を見上げる。

スネーク「・・・!？」

何かが空から落ちてくる。

スネーク「!・・・逃げろ!クラスター爆弾が落ちてくるぞ!！」

三人はバラバラに離れる。

チュガガガガガン!!!!

スネーク「大丈夫か!？」

雷電「ああ・・・」

五郎「なんとか・・・ってスネークが大丈夫!？」

スネーク「・・・っ!!」

スネークはさっきの爆発の衝撃で飛んできた石ころが偶然左目にあたり、目から出血を起こしている。

スネーク「・・・とりあえず失明はしてなさそうだ。」

雷電「くそ!だれだ!」

その時だった。またしてもいやな予感がスネークの第六感に駆けめぐる。

上からなにか降ってくる感じがした。

スネーク「くっ!」

スネークはいきなり横っ飛びをする。何かから避ける!ように。

スネーク「誰だ!」

USPを構える。

？「上の奴らから聞いてはいたがやはりお前たち来ていたか雖見沢に……。さすがだなスネーク！ステルスボブスーツをきていても俺の存在にきづくとはな！」

スネークは見えない相手と会話をしている。

雷電「誰だお前は！」

？「俺だよ。雷電久しぶりだな」

雷電「……まさか！？」

ファットマン「そうだよ。おれだよ！！雷電！ファットマンだ！この世界で最高にして……。最低な男さ！」

雷電「バカな！？お前はビクシエルで倒したハズじゃ……」

ファットマン「俺はあの後、辛うじてだが息を保ってた。瀕死の俺をオセロットに助けられたんだよ。

そして奴が逃走したときのメタルギアにのせられた。」

雷電「何！？」

ファットマン「まあ気がついたら愛国者の研究所にいて、体を骨の髄まで改造されたんだがな。悪くない体験だった！お陰でまた俺は爆弾界で伝説になれるチャンスがきた！」

そしてファットマンは再び透明になり目に留まらぬ猛スピードでスネークに左側から体当たりを仕掛ける。

スネーク「ぐあ・・・！！！」

スネークは避けたが目の負傷もあってか完璧には避けきれずぶつかり奥にあるクラスタ爆弾で燃やされている大木まで吹っ飛ばされる。

スネーク「・・・熱！」

ファットマン「ははは、無様だなスネーク！！！」

そしてファットマンは実体化しなにやら手のひらから穴が開く。

ファットマン「くらえ！！！」

ファットマンが穴から小型ミサイルを発射する。

スネーク「・・・ちっ！！！」

スネークはUSPを構える。

雷電「させるか！」

雷電がスネークの前にたち、刀でミサイルを切り倒す。

ファットマン「……！お前その身のこなし、格好は……！」

雷電「そつだ。俺もお前と一緒にだ！」

ファットマン「ほう……面白い……！どっちが高性能の強化骨格か勝負だ！」

ファットマンは再びステルスモードになる。

そしていきなり後ろに猛スピードでムーンウォークを始める。

五郎「が……！」

五郎はぶつかった衝撃で思いっきり空中二回転しながら吹っ飛ばされる。

スネーク&雷電「五郎……！」

そしてファットマンは再び超大ジャンプしてクラスター爆弾をバラまく！

ファットマン「イツツ、ショータイム！デスパ―ティー！！！」

そのころ

昭和58年5月28日

午後11時

〔古手家・倉庫〕

梨花「……ん」

古手梨花は目を覚ます。

梨花「11時？」

梨花は昨日の夜は沙都子と夜遅くまで人生ゲームを楽しんでいたため寝る時間が遅かった。最初梨花が勝った。沙都子は負けづ嫌いな為なかなか寝かせてくれなかった。沙都子も普段は早起きをするが今日はノックアウトしている。

梨花「寝過ぎたわ……」

梨花は当たりを見回す。

梨花「羽入？」

返答がない。

梨花「羽入？どこにいるの？」

やはり返答がない。

梨花「羽入……どこにいったのかしら？」

沙都子「梨花……なにブツブツ言ってるのですの？」

沙都子が寝ぼけ眼で梨花に聞く。

梨花「みいー。なんでもないですよ」

沙都子「梨花は時々意味分からない発言しますわ……」

沙都子はまた寝る。無理もない。明け方まで白熱したバトルだったから。

梨花「……（何かしらとても嫌な予感がするわ。こんな時なぜいっつもいないのかしら……）」

ピンポン

だれか来た。

ガラガラ

扉を開ける。そこには背の高い眼鏡をかけた男がいた。

梨花「入江？」

入江「おはようございます古手さん。どうです？これから沙都子ちゃんと私と古手さんでピクニックをしませんか？」

梨花「・・・メイドの格好をさせなければOKですよ。みんなはいますか？」

入江「それがみんな都合悪くて・・・三人でどうかと」

梨花「構いませんです。とりあえず家に上がりませんか？」

入江「ありがとうございます！本当は僕の新しい友人もつれてきたかったんですけどね・・・」

梨花「新しい友人？オタクンの事ですか？」

入江「さすが古手さん、しっていましたか。そうなんですよ！彼と

はすごく気があつて！」

梨花「見た目も似てますですよ。にぱー」

入江「ははは、そんなですよね！ところでどこにいきたいですか？」

梨花「みいー、そうですね……（羽入、全くどこにいるのかしら・
」

十五話 デス・パーティー（前編）（後書き）

僕の知識不足で後でわかったのですがMGS4版の雷電のスーツはどうやら体の一部みたいにされてるらしいですね。スイマセン（
| 〃 ; ）ここでの設定は取り外し可能とすることにしています。

ちなみにスネークと五郎は野戦に備えスニーキングスーツではなく森にカモフラージュできるよう迷彩服をきています。

さて今回はオリジナルの敵キャラも現れます！

十六話 デス・パーティー（中編）（前書き）

今回も引き続き戦います！

十六話 デス・パーティー（中編）

落下してくるクラスター爆弾はスネーク達を容赦なく襲う。

三人は自身を守るのに精一杯といった感じだ。

ファットマン「ハハハ！どうした！どうした！！」

ファットマンは更にクラスターを放つ。爆発の影響か森の木々が燃え始める。何本か木も倒れた時める。

ファットマン「爆弾だけじゃない！！くらえ！！！！」

ファットマンは小型のサブマシンガンを乱射する。

雷電「く！！」

雷電は高周波ブレードで弾き返す。

雷電「隙が甘い！！」

ファットマン「何！？」

雷電は一気にファットマンの後ろに回り込み刀で切りつける。

更に

ファットマン「グハア！！」

ファットマンの体の急所を狙う。誰もが死んだと確信できる一撃だった。

・・・無論、普通の人間ならでわの話したが

ファットマン「・・・まだ終わってない!!!」

雷電「くそ!この!」

雷電は上段から刀を振り下ろすがファットマンにマシンガンで防御される。

スネークはじつとファットマンの足元にあるローラーブレードを狙ってる。転けさせる作戦だ。早くて照準が合わないため狙い辛いこの上ないがようやく目が冴えてきた。無論片目だけだが。

しかしその時だった。

スネーク「・・・!」

スネークは照準を変える。いや変えなければならなかった。

しかし、照準を構えようとしたときは既に遅かった・・・！

スネーク「グハア！？」

スネークは何者かに腹を蹴り飛ばされる。

五郎「スネーク！？」

雷電「・・・！？」

？「ははは！伝説の英雄も所詮私のスピード前では無意味・・・か。」

スネーク達の前に現れたのは全身をヒョウ柄の迷彩服で身にまとったなによりやつり目の女顔の男だった。

ファットマン「おいおい、やっときたか。パーティーに遅れるとはマナーがなってないな。せっかくのイケメンもこれじゃ台無しだ。」
？「黙っていたまえ豚男。私はスピードが傲慢なのさ。あつという間についてしまうから少しゆとりをもってきただけさ」

スネーク「誰だ！？」

？「おおつとすまない。私の名前はスマート・チーター。スピードを極めた男。いやスピードを極めた紳士さ！以後お見知りおきを・・・」

「

自己紹介が終わるなり薔薇をスネークに投げる。

コイツは英国紳士でも気取ってるのか？しかもあの態度、妙に変だし気持ち悪い！スネークは少し引き気味な気分になる。

スネーク「・・・キザなヤロウだ」

チーター「さあ！果たしてついてこれるか!？」

スネーク「なめるな！」スネークはUSPを構え狙撃する。

スネーク「（よし照準も合ってる！やったか!?!）」

チーター「甘い・・・。」

スネークが撃つたのはチーターでなくチーターの残像だった。

スネーク「・・・?グハ!？」

スネークは肩を爪で切りつけられる。爪で切られたというよりナイフに切りつけられる感触だった。ひどい出血だ。

スネーク「・・・く!」

チーター「私の爪はナイフより鋭く剣より強い!」

ナイフも剣も鋭いだろ。スネークはつつこみたかったが。出血が酷く言葉を出す余裕もない。

トゥルルル、トゥルルル

大佐「スネーク大丈夫か!？」

スネーク「……これが大丈夫に見えるか？」

大佐「スネーク!ひとまず上手く奴の攻撃から逃れる!奴も人間だ・
・一応な。なにか弱点があるはずだ。」

スネーク「逃げながら様子を伺うんだな。了解!」

大佐「無理をするなよ。スネーク!」

スネーク「……この状況で無理しなければそれこそ俺は死ぬ!」

スネークは回避の態勢をとる。

チーター「ははは!避けられるか!？」

ガツ!

スネークは間一髪よけて、木が思いつきりえぐれる。

チーター「ほう・・・伝説というのはあながち間違いではなさそうだな。初めてだぞ！強化骨格の人間以外で私からよけきれたのは！あとこんなのを何回よければ分かるか分からない。早いところ決着をつけなければ体力がもたない・・・！」

五郎「スネーク今助けるぞ！」

五郎はチーターに閃光弾を投げるがあのスピードでは無意味だった。

五郎「くそ！・・・ん。」

その時だった。

五郎に目掛けてミサイルが飛んでくる。

五郎「な！！！」

バガアアアン！！

五郎は間一髪避けきる。

？「・・・避けられたか」

五郎「誰だお前は！？」

？「オレの名前はストロング・エナジー。」

そういつてエナジーは縛炎の中から姿を現し、殴りかかる。

五郎「ゴハア！」

五郎は右目を遣られる。幸いに失明はしてなさそうだが、スネークと同じ状況になる。衝撃で眼鏡が壊れる。

五郎「く！・・・なんてやつだ。」

五郎はエナジীর姿を見た。典型的なマツスルな黒人だった。ただ体は二メートルを優に越えている。五郎を殴った左手にはギンギンとしたメリケンが。右手にはロケットランチャーがある。

エナジীর「ジ・エンド・・・」

五郎「・・・！」

バガアアアアン

超近距離からロケットランチャーを放たれる。かろうじて五郎は避ける。

なんだあいつは！五郎はエナジীর姿に恐怖を覚える。顔が青ざめる。しかし攻撃はやまない。

エナジীর「ウリヤアアア！！！」

五郎「ガハ！！！」

今度はロケットランチャーで五郎の左頬を殴る。五郎の顔はみるみ

る青く腫れ上がる。

エナジー「今度こそ……ジ・エンド」

五郎「負けるか……!!」

エナジー「!？」

五郎は改造カメラを構える。

五郎「富竹フラッシュ2!レーザービーム!!」

エナジー「!!」

五郎のカメラからレーザービームが放たれる。エナジーは避けきれず、頬にビームがかすめる。

ジュ!

エナジー「く……」

エナジーの左頬には血が流れる。

エナジー「思ってたより……やるな。」

エナジーはまたロケットランチャーを構えようとする

五郎は回避すべくエナジーがランチャーを構える前に

五郎「トミタケフラッシュユ2!」ピカ!

凄まじい光が出てくる。

エナジー「ノハ!？」

エナジーは目に相当きてるのか、倒れ込み目を押さえてる。

五郎はそのすきに距離を置く。

五郎「・・・(ランチャーを使用するから長距離戦は自殺行為。しかし近距離でもあのメリケンが待ってる・・・どっちにしろやっかいたがあのガタイ、凄まじい威圧感を目の前にして戦闘するのは心臓に悪い・・・!!)」雷電はファットマン

スネークはスマート・チーター

五郎はストログ・エナジー

各々が超人同士の戦いを始める。

く森の茂みく

?「俺たちの出番はないのかな?パーティーにでたいよー。」

?「ちょっと落ち着きなさい。私たちはパーティーを盛り上げる為

の裏方をやるのよ」

？「ち！」

一方過去の離見沢では

午後12半

〔古手家・倉庫〕

ようやく目を覚ました沙都子はいまピクニックにむけ、弁当を梨花と作っている。

沙都子「今度は監督も一緒に人生ゲームしませんか？」

入江「いや〜そうしたいですけどね。休日くらいしか時間ありませんよ？」

沙都子「構いませんことよ！もし監督が勝ったら私がメイド格好でご奉仕差し上げてございましてよ！」

入江「……………！！今すぐ！今すぐ人生ゲームを始めましょう！！」

梨花「入江……………今日の目的の主旨がずれてきてますです。」

沙都子「今日は残念ですけど勝負はお預けでしてよ！」

入江「そ、そんな。私のメイド・イン・ヘブンが・・・」
「やれやれこの男は。」

梨花と沙都子は呆れた表情を浮かべる。

沙都子「ところで梨花？」

梨花「どうしましたか？」

沙都子「私・・・先ほど寝ていた時に変な夢を見ましたわ」

梨花「夢・・・ですか？」

沙都子「ええ、なんだか山奥で誰かが必死に何者かと戦ってる夢でした。」

梨花「沙都子は映画の見過ぎなのです。にばー」

沙都子「・・・そ、そうかしら？（スネーク先生とビックにーにーもいたような？）」

入江「ははは、きっとそうですよ！（戦いの夢？L4の兆候？いやまさか・・・）」

十六話 デス・パーティー（中編）（後書き）

次回でデスパーティー編終了します。

年内までには終わりにしたいのですが恐らく厳しいです。多分予定通りいくならば40話辺りで終わるか。勿論のびるかもしれないし、縮む可能性もありますが・・・

ひとまず次回もヨロシク！！

十七話 デス・パーティー（後編）（前書き）

今回でデス・パーティーは終了です。

十七話 デス・パーティー（後編）

各々が激しい攻防を繰り広げる。が、いまの所敵側に有利な状況が続く。

スネークにおいては出血の影響で体力がなくなってきたのか攻撃されやすくなっている。爪でさかれたり、蹴飛ばされたり、しまいには噛まれたらしている。チーターは紳士を意識してるが、彼の歯は刃のごとく鋭く尖っている。

スネーク「・・・紳士どころか、とんでもない獣だな」

チーター「失礼な・・・私の美しい攻撃を」

なにが美しいだ

しまいには吐き気すら催す。

チーター「さあ、そろそろフィナーレといきましょうか・・・」

チーターは両拳を目の高さまでもってきて、怪しげなポーズを決めた。そしてきえる。

雷電、五郎は自分達の敵を倒すだけで精一杯だ。護衛は期待できない。

なぜかいまになって、この状況になってメイリンに嫌という程教えられたことわざが脳裏に出てくる。

いや！いまそんなこと考えてる余裕など微塵もない。

チーターは今この瞬間確実に俺に近づいている。狙うならどこだ！？

この状態なら次やられればもうダメかもしれない。

勝負は一瞬だ。

クールになれソリッドスネーク！チーターは次はどこを狙う！？

スネーク「・・・は！」

スネークはあることに気づいた。自分の傷を見る。ほとんどが真つ正面と右側の腹、顔、足・・・

スネーク「・・・なる程」

チーター「ソリッドスネーク！死す！」

チーターが近づく！

ドン！

スネーク&チーター「グハア！」

結論から言つと。

両者は相打ちにあつた。ボクシングで例えるならクロスカウンターのような現象が生じる。

スネークは数回転しながら10m吹っ飛ぶ。

客観的にみればスネークが一番ヤバそうな感じだ。

しかし

チーター「ああああおえういかかかまかにあ
！！」

チーターはたった一発の銃弾だが恐ろしい程ダメージをつけてるよ
うだ。腹部をやられたらしい。

スネークはチーターから真つ正面と右側を中心に攻撃されていた。
これはチーターが裏を読んでいたからだ。

誰でも相手の左目が負傷してればそっちを攻撃仕掛けたくなる。
しかしあえてチーターはしなかった。最後までじわりじわりと追い
詰めて相手がボロボロになり意識が朦朧とした所左側からを確実狙
う……。これが常人ならとつくにやられている。しかし相手は伝
説の英雄。一筋縄にはいかない。

スネーク「……とどめだ」

スネークは後ろに背負ってたP S G 1（長距離用のスナイパーライフル）を取り出す。

スネーク「……（オタコンに頼んでよかった）」

そしてスネークはゆっくりと照準を合わせて。

カチャ

撃つ

バン！！

チーター「……！？ニアアタアアゴゴゲギ！！！」

完璧ではなかった。

本当は頭部を狙ったが外れてかわりにチーターの左目が遣られる。無論スネークの左目とは違い完璧に失明したのは言うまでもない。チーターはそのまま失神する。凄まじい形相のままに。

スネーク「スピードだけで防御が極端に弱い。そして己のスピードに過信するあまり攻撃される痛みもわからない。これがお前の弱点。」

スネーク「しかし、最後まで俺の弱点の左側をあえて残しておきなぶり殺しをやるという発想、なかなかいいセンスだ。……獣らしい戦いだ。」

そのままスネークは木にもたれ、目をつぶる。

五郎「スネーク！うまくいったんだね！……ってうわ！！！」
ンブン！！

凄まじい勢いで殴りかかるストロング・エナジー。

しかしまだちゃんと視力が回復しきれていないのか攻撃に正確性が
ない。

エナジー「目が……」

エナジーはふらふらしている。辛うじて見える五郎に攻撃をしてい
るといった感じだ。

雷電「フン！」

ファットマン「ぐわ！」

ファットマンは雷電の剣裁きの前に窮地にたたれる。

ファットマン「(マズい、体力も弾薬もそこをつき始めてる……
！！！！)」

その時だった。

バン！！！！

遠くから銃声がする。

全員「!?!」

何者かが雷電に狙撃をする。

雷電「!?!」

雷電は嫌な予感をいち早く察知したのか、避けるが完璧に避けきることが出来ず右側の腹部をやられる。

雷電「バカな!強化骨格なのに銃弾で腹部を貫通するだ?!」

それだけ相手の銃の性能の高さを意味する。

ファットマン「九死に一生を得るとはこのことか?・・・さてとそろそろパーティーを終わりにしよう。」

そういつてファットマンはなにか取り出す。

雷電「なんだ!?!そのスイッチは!?!」

ファットマン「このスイッチか?くくく、知りたいか?」

雷電「何だ!」

ファットマン「俺は数日前にあそこの巨大な空き地にC4を備えた。しかしそれだけならかわいいもんだ。あのグラランドのど真ん中の奥深くに穴掘り、俺の特性新型原子爆弾を用意し埋めた。」

雷電&五郎&スネーク「!!!!」

スネークは意識が飛びかけていたがファットマンの話で一気に覚める。
ファットマン「この原爆の中に雛見沢症候群がたんまりつまっている」

スネーク&五郎&雷電「何!!!!!!」

雷電「バカな真似はよせ!!そんなことしたら興宮どころか鹿骨市まで被害が及び大災害が起きる!!」

五郎「そつだ!第一そんなことしたら君たちの命もなくなるよ!??」

ファットマン「ハハハ!!残念だな。死ぬのはお前らだけだ。俺たちは死なないさ!!」

雷電「え・・・どうゆうことだ。」

雷電達はファットマンの言っている意味がわからない。

~~~~~

スネーク「く……ファットマンめ。」

スネークはPSG1を構える。スネーク自身少しでも気を油断したら気絶寸前まで追い詰められている。レーションを食べたいがそんな暇は断じてない。

そして照準を原爆スイッチに定めたそのときだった。

ゴゴゴ

スネーク「？」

地下から音が？

ドスン！

スネーク「！」

地面から木の巨大な根っこが飛び出す。

とよりスネークのわき腹にアタックする。

スネーク「ぐわ！な、なんだ！」

スネークは謎の植物に追われながら走りつつPSG1を構える。

スネーク「クソ！走りながらだと照準が狙にくい！もっと近づけば……」

ファットマンからスネークの距離は結構離れる。

ファットマン「おっと！スネークあんまり調子にのるとスイッチおしちゃうよ!？」

スネーク「!」

後ろからは謎の巨大植物が、前には原爆のスイッチを手にしているファットマン。・・・そしてなにやら遠くで謎のスナイパーらしき人物に狙われている気がする。さつき雷電を襲ったやつか？

スネーク「ひとまず原爆をとめねば・・・!」

スネークは決死の覚悟でPSG1を構える。

その時だった。

全員「!!!!!!」

天上から大きな光をまとった、謎の人物が現れる。しかし光で相手の顔を確認できない。

ファットマン「な、なんだ!？」

?「異国ノ者ヨ、緑溢レルコノ土地ヲ荒ラストハ・・・野蛮ニシテ愚力ナ人間ダ」



ファットマン「しかたない、もうスイッチ押しすぜ!!」

スネーク「・・・ち！」

スネークは照準を定める

?「無駄ダ・・・モウソノ兵器ハ発動シナイ永遠ニ・・・」

ファットマン「何!バカな!!!!!!!!!!」

スイッチを何度押ししても爆破することはない。

全員「!!!!!!!!!!」

まさかの展開に足膝を落とし地につけるファットマン。

ファットマン「こ、こんなハズじゃ・・・」

エナジー「・・・逃げるぞファットマン。作戦は失敗だ。」

ファットマン「ち!覚えてやがれ!!!!!!!!!!みんな脱出だ!!」

スネーク「まで!!!」

スネークが構える。しかし・・・

全員「!!!!!!」

突如光がファットマンを覆う。

そしてファットマン達は光と共にきえる。

雷電「な！奴らは!?!」

五郎「ステルスで消えた?」

ステルス「・・・いや違う。レーダーを見る!」

五郎&雷電「!」

レーダーは4人しか反応していない。ステルスでさっき消えたばかりならレーダーでまだ近くにいてもおかしくない。

スネーク「本当に消えたんだ・・・信じられんがな。」

雷電「そういえばあの物体は?」

雷電は謎の光の物体に指を指す。

やがて光は消え始め人らしき者が見えてくる。そして地面に倒れ込む。

全員「！」

スネーク達は近づく。

スネーク「お前は！」

雷電「羽入！？」

五郎「・・・子供？」

倒れてるのは羽入だった。

雷電「大丈夫か！？羽入！！」

雷電は羽入を抱きかかえる。

羽入「これだけの力を出すだけで倒れてしまうとは・・・やはり能力が低下してきてます。」

雷電「羽入どうして・・・」

羽入「少しは役に立てましたか？雷電。」

雷電「！！」

羽入「今回・・・だけですよ。」

ガク



羽入は気絶する。

雷電「羽入！」五郎はいまいち状況が読めない。

スネーク「ひとまず・・・戻ろう過去の雛見沢へ」

過去の雛見沢

今後2時半

↳雛見沢村のとある通り道↳

入江「いやー古手さんも沙都子ちゃんも本当に料理がお上手なこと！とてもおいしかったですよ！」

沙都子「オーホッホッホ！私にかかれば料理なんてチヨチヨイノチヨイですよ！」

入江「さすがは私の未来のお嫁さんです！」

沙都子「・・・なんでそこまで勝手に話が大きくなるんですの？」

梨花「入江沙都子になってしまっです。にぱー」

そんな冗談を楽しんでいるとなにやら三、四人の人物がふらふらと安定しない足取りで近づくと

入江「？・・・あれは」

沙都子「？」

梨花「スネーク！雷電！五郎！それに・・・羽入！？」

スネーク、五郎は今にも倒れそうな雰囲気、雷電は羽入をおんぶしている。

入江「どうしたんですか！！その格好は！！」

スネーク「悪いが、話は後でもいいか？いまから家で治療してくる」

入江「なら私の診療所にきてください！私は入江診療所の入江です！休日ですが特別に許しましょう！！」

（入江診療所）

いまスネークたちはベットで寝かされている。診療所についたとたん、スネーク、五郎は気絶する。

入江「しかしまさかオタクさんの友人さん達とは・・・」

雷電「まあ、驚くのもむりはない。」

雷電は三人の中で大した傷でもないため診察を拒む。もっとも一番の理由はナノマシンや特別な血液を使っていることを知られたくないことだが。

入江「一体なにがあっただんですか？」

雷電「……ちょっと車に引かれてな」

入江「あの傷をみてどうしたら車に引かれたなんて言えるのですか？」

無理もないスネークは左目、五郎は右目を大怪我。後一歩ひどかつたら確実に失明していた。

それと全身にわたる無数の傷。車でできる怪我でないことは一目瞭然だ。

スネーク「気にするな。あんたには関係ない。」

スネークは目が覚めたのか入江に声をかける。

入江「……そうですか」しかし入江はわかっている。医者である入江はこれまで自衛隊員も治療も携わったこともある。これは一悶着あったことぐらい。

ガチャ

誰が入ってくる。

オタコン「大丈夫かいみんな!？」

スネーク「……オタコン!きたか。」

オタコン「入江……恩にきる!」

入江「いえいえとんでもない。」

オタコン「・・・スネーク」

スネーク「なんだ？」

オタコン「ビッグボスに瓜二つ・・・だね」

スネーク「・・・あの男と一緒にするな」

今スネークと五郎は黒い眼帯をしている。話によると全治2ヶ月だ  
そうだ。

もっともビッグボスは逆の右目がだが。

五郎もやがて目を覚ました。

入江「ところで古手さん。この子は？」

沙都子「そうそう、私も気になってましたわ。」

梨花は今だに気絶中の羽入の事を簡単な内容（嘘）で説明。

梨花「・・・というわけで彼女は古手羽入といって僕の親戚なので  
す。にばー」

沙都子「初耳ですね。このような親戚の方がいらしてましたなんて  
」

梨花「ちなみに今度うちに引っ越して転校してくる予定です。」

沙都子「梨花！そういうことはもっと早くいつてくださいますし！」

入江「ほう、これは楽しみですね。」

さっきまでスネークたちを怪しんだり、雷電の服装に特異な目でみていたが、すっかり頭の中はメイドモードになっている。

入江「しかしスネーク先生も五郎さんも羽入ちゃんも2日間安静にしてくださいさというちの診療所で。入院ではありませんが奥の部屋を貸すので安静にしてください。」

スネーク「・・・わかった」

入江「ところでオタコンさん」

オタコン「ん？」

入江「後でなにがあつたか教えてくれませんか？スネーク先生達は教えてくれなくて・・・」

オタコン「ごめん・・・スネークは頑固な所があるから教えてくれないと思う。」

オタコンもさすがに今は素性をバラす訳にはいかない。どんなささいな内容でもだ。

入江「・・・わかりました。」

とある基地

ファットマン「……すまない。任務失敗だ」

？「光の物体かあ……まあ今回はしょうがない。やはりあの男が未来の雛見沢にきていとはな。聞いた時は本当に驚いたもんだ」

エナジー「だがさすがに、1983年の雛見沢にはこれるはずがない。」

？「……奴の事だ。意外にもきてるかもしれんぞ。」

エナジー「な……ばかな！」

？「いずれにしてもあの計画を妨害しようとするやつがいるならば排除するのみだ。」

？「とくにスネークを感じさせる噂があるならばどんな手をつかっても構わん！」

十七話 デス・パーティー（後編）（後書き）

デス・パーティー編いかがでしたか？

次回は再び圭一主観で物語が進行します。

十八話 記憶（前書き）

久しぶりの投稿です！



## 十八話 記憶

昭和57年未明

前原一家は今ある家に訪問している。

前原夫妻「この度はうちの息子がとんだご迷惑を・・・」

圭一「本当に申し訳ございません!!!」

前原圭一は今涙を流しながら女の子とその家族に謝罪をしている。

圭一は、ふと彼女の顔を見る。顔には片方の目には眼帯がはられている。もう片方の目にはまるで汚物でも見るかのように、あるいは酷く軽蔑するかのように見下している。

圭一「本当に・・・ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!  
!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!ごめんなさい!  
・・・」

声が枯れるまで誤る。身も心も苦しくくなる。しかし謝り続ける。  
彼女はいまどんな表情をしているのか?見たいが見れない。ただ謝ることしかできない。

その時だった。

圭一「?」

辺りが暗闇になり誰もいなくなる。

圭一「え？なんだ一体・・・？」

そしていきなり目の前にだれかが現れる。暗いが何故かその人物だけハッキリ見える。

魅音「圭ちゃん・・・そんな人だったんだ。おじさん圭ちゃんのこと見損なつたよ」

圭一「魅音！！」

魅音は鷹のような冷たい目で圭一に詰め寄る。

詩音「お姉。こんな野蛮人シカトですよシカト！」

圭一「・・・詩音！！」

沙都子「圭一さん・・・」

圭一「沙都子！！」

圭一が近づく。しかし

沙都子「いや・・・いや、いや」

沙都子は酷く怯え首を横に振る。

沙都子「くるな！！ケダモノ！！！！」

圭一「！！・・・そんな」

梨花「圭一。僕は見損ないましたのです。もう二度と近寄らないで

ほしいのです。」

圭一「梨花ちゃんまで・・・」

圭一は一步近づくと

梨花「ちょっと近寄らないっていつてんの聞ってるの？汚らしい。」

梨花はいきなり大人びた口調を変える。

圭一はショックのあまり思わずあいた口が塞がらない。

レナ「圭一くん」

圭一「レナ！」

レナ「圭一くん。とんでもない人だったんだね。レナ、失望したよ」

圭一「レナ、これは昔のオレだ！今は違う！今は！」

レナ「嘘だ！！！！！！！！！！」

圭一「ひ！？」

レナ「圭一くんはレナたちの仲間のふりをしていて本当は後でモデルガンで襲撃でもしようとしてたんでしょ。ね、圭一くん」

圭一「違つんだレナ！！俺はお前たちを心から仲間だと・・・」

圭一はレナに近づくと。

レナ「近寄るな！汚らわしい・・・！」

圭一「レナ・・・」

圭一はその場でへたれ込む。

そして仲間は圭一から遠ざかり始める。

圭一「待ってくれみんな！頼むお願いだ・・・！待ってくれ！！！」

チリリリリン！！

5月30日火曜日

午前7時

圭一「は！・・・夢？」

圭一は目が覚め目覚まし時計を止める。今圭一は体中、汗と涙でビツシヨリだ。

圭一「・・・いやな、夢だったな。」

ほっと胸をなで下ろし。・・・またあんな事、二度と繰り返してたまるかよ。

圭一の母「圭一ご飯よー！」

圭一「あいよ」

〃

圭一「行ってきまーす」

母「気をつけてね」

圭一「・・・」

本当にいやな夢だった。せつかく楽しい日々を送っているのに、あんな夢のせいで頭痛くなるぜ。

・・・確かにレナ達がオヤシロ様の祟りについて深く語ってくれない時は正直イライラした時も内心あった。この村はなにかおかしいと疑った時もあった。それでも大切な仲間にはなんら変わらない。いまならそのレナ達の気持ちも少し分かるかもしれない。

俺にも隠したい事がある

人の人生は十人十色。みんな言わないだけで色んな人生を歩んでいる。楽しい事ばかりじゃない。それらを共有してこそ仲間でもあるが、無理に問い詰めたり、或いはその人過去の生き方全てを否定するのはよくない。

仲間なら受け入れる。もし仲間が誤った方向に向かいそうならお前

が救え。

そんな事を俺は土曜日スネークから学んだ。

「全てを打ち明けなければ仲間じゃないという考えは違う。」

なぜか無意識にこんな言葉を述べてみる。

その言葉を口にしたとき俺はなぜか懐かしい気持ちになる。  
昔だれかに教わった気がするから。

その言葉の大事も理解できる。ただ・・・

やっぱり俺個人としては・・・わかってもらいたい。過去の俺を受け止めほしい。勿論、それがキツカケで仲間から冷たい目で見られるかもしれないだろうけど。

俺はこれからは何かあったとき、仲間を守りたい。守る為にはやはり俺の過去を受け止めてほしい。

仲間の為ならなんだってしてやりたい！！

でもあの過去を受け止めてくれるのか？

レナ「圭一くん？ねえ圭一くんってば？」

いつの間にかいたのかレナは俺に話かける。

圭一「うわ！？レナ！いつの間に！？」

レナ「さっきからずっと呼んでたんだよ？だよ？」

圭一「す、すまない。ちよっと気分が悪くてさ」

レナ「大丈夫かな？かな？」

圭一「ああ・・・もう心配ない。」

圭一はレナと一緒に登校し始める。

レナ「ねえ圭一くん」

圭一「ん？」

レナ「圭一くんはなにかレナに内緒や隠し事してないかな？かな？」

レナは下を向いてやや低い声で聞いてくる。

圭一「いや・・・べつに」

いきなりはこの話をするのはきびしいぜ。

レナ「嘘」

レナはちらりと低い声で言っ。

圭一「……どうしてそんな事を」

レナ「レナね、相手の目をみると大体何考えてるかわかっちゃうんだよね。圭一くん凄く悩んでそうだから何か合ったんじゃないかってね。」  
「どうしようか。」

こんな朝からヘビーな話はできない。心の準備もまだできていない。

(近寄るな、汚らわしい!)

夢のなかのレナの言葉が響く。

くそどうすればいい!クールになれ前原圭一!口先の魔術師を今こそ本領発揮だ!

圭一「ええと……そうだ!!俺は夢を見た!!」

レナ「……夢?」

圭一「そうだ!レナがある危険そうな奴らに襲われていたんだ!おれがレナを命がけで助けた!そしてなぜか俺とレナはそのままラブラブな雰囲気になりその後二人は結ばれた……って夢をみた!だからついレナをみたら変に意識してしまっていたんだ。」  
「ボン!!」



レナは頭から湯気が出る。

レナ「レ、レレレ、レナと圭一が・・・む、結ばれる。む、結ばれるって事は事はああああああ・・・！！！！」

レナは顔が真っ赤になり目がククラクラし始める。なにやら結ばれた後の妄想でもし始めたようだ。

圭一の暴走はとまらない。

圭一「それだけじゃない！結婚祝いとしてケンタくん人形を1000体をプレゼント！！さらに結婚式の時の梨花ちゃんや沙都子と魅音の服装はネコミミスク水だあああ！！！！」

ブブブブブー！！

バタ！

レナは鼻血を大量に吹き出し倒れる。

圭一「うわ！あちゃ〜やりすぎたか。」

さすがに反省する。先程まで本音を打ち明けるべきか否か本気で悩んでいたのに、その場しのぎといえこんな下らない嘘ついて俺は何やっているんだ。・・・少なくともレナも本気で心配してくれていたのに。

圭一「レナ・・・すまない。」

気絶したレナに謝り、圭一はレナをおんぶし始める。

女の子をおんぶするってなんかドキドキするな。これが男の下心と  
いうやつか？

反省しなければならぬのに情けない。こんな所で無駄に口先の魔  
術師としての才能につかっている自分に圭一は複雑な気持ちになる。

魅音「圭ちゃん、レナおはよう！って圭ちゃん！レナはどうした  
の！？」

圭一「ああ、色々あってさ大変だったんだよ！」

魅音「色々って？」

圭一「あ、あんまり気にするな！」

魅音「？」

（離見沢分校）

結局レナをそのまま分校までおんぶして連れて行く。教室についた  
途端レナは目が覚める。レナによると登校中の記憶が無く、なにが  
あったのか全く覚えていないみたいだ。・・・レナ、本当にすまな  
い。

レナ「ごめんね（<|>）圭一くん」

圭一「いや別にいいってことよ。ハハハ・・・」

魅音「そういえばスネーク先生大丈夫かな？昨日学校休んでたけど。」

「

圭一「そっぴやそっぴだな。大丈夫か？スネークのやつ」

ガラガラ

教室にだれかが入ってくる。

魅音「スネーク先生！」

富田「先生大丈夫？」

岡村「眼帯してるじゃないですか！」

スネークは眼帯をしていた。

スネーク「ああ、心配かけたな。ちょっと目を怪我してしまっぴな。

」

グサッ

圭一の心に見えない何かが刺さる。

目……？眼帯……？

圭一は顔がみるみる青ざめる。また今朝みた夢をいや過去の封印したい思い出が脳裏を駆け巡る。

脳裏に浮かぶは夢にでてきた……いや、去年俺がモデルガンで傷つけた目を少女の姿であった。

スネーク「・・・？」

スネークは顔が青くなってゆく圭一を見る。圭一の目の瞳が極端に小さくなり、茫然とした表情をしている。

スネーク「圭一・・・？」

圭一「・・・」

圭一はスネークの声がかこえていない。

魅音「圭・・・ちゃん？」

岡村&富田「前原さん？」

スネーク「おい！どうした圭一！」

スネークは圭一に近づき肩を揺さぶりさせる。

圭一はようやく我にかえる。

圭一「はあ！・・・スネーク？」

スネーク「圭一しっかりしろ！どうした！」

圭一は改めてスネークの顔を見る。やはり眼帯があった。

よりによってこんな時に自分が思い出さたくない記憶を蘇らせるようにタイミング悪くスネークは怪我をしている。

圭一「ス、スネークこそどうしたんだよ！！その怪我は！大丈夫か

よ!？」

お前の方が大丈夫か。

スネーク思った。

スネーク「ああちょっとな、車にはねられてな。目をやられた。全治2ヶ月だそうだ」

圭「ま、マジか!大変だったな。死ななくて良かったぜ!」

スネーク「車にはねられる位で俺は簡単には死なん!」

車にはねられる位でって……。みんな思わず一瞬沈黙が続く。

圭「へへへ、さすがスネークだな……。ていうかその格好ますます独裁者にみえるぞ」

魅音「それ以前にスネーク先生がだんだん人間とは違う生き物に見えるよ。ねえレナ?」

レナ「・・・」

魅音「レナ?」

レナ「ん?な、なにかな魅ちゃん?」

魅音「いや、スネーク先生は人間とは思えないって話をしたの」

レナ「あ、あはははは。そうだよ。スネーク先生無敵だよ。」

一瞬だが。魅音はレナの目つきがいつもとは違うふうに見えた。まるで鷹のような、恐い感じだった。

（朝礼）

魅音「起立、礼。着席！」

知恵「今日はスネーク先生が復帰になりました！」

スネーク「みんな心配かけたな！」

知恵「それと今日は転校生を紹介します！」

ザワザワ

魅音「転校生？」

富田「最近よその土地から来る人おおいな」

岡村「どんな人だろ？」

沙都子「もう私と梨花はご存知ですけどね」

梨花「にぱー」

圭「楽しみだな！」

ガラガラ

入ってきたのは女の子だった。変わった髪の色をしていて、なぜか角？のような物がある可愛らしさ女の子だ。

知恵「紹介します。転校生の古手羽入さんです！」

羽入「ど、どうも・・・古手羽入なのです。ど、どうか、よろしゅう、よろ、よろ・・・」

羽入は頬を赤くさせモジモジしながらも頑張って自己紹介をする。

羽入「よろしゅうおねがりしまひゆなのです！」

くある喫茶店

？「ねえ〜てっちゃん」

？「なんじゃ、律子？」

？「あんたのそこ親戚の家に金がたんまりあるのほんとかい？」

？「多分な本当じゃ。でもまあたんまりじゃなく、そこそこの感じであつとる感じや。今その金の持ち主が行方不明じゃからな。チャンスなんよ」

？「へ〜いいじゃんいいじゃん！でもてっちゃんの場合本人が居ようが居まいか関係なくぶんどっちゃいそうだけどね。」

？「ハハハハハ！律子はどうなんよ？あの例の旦那は？」

？「それがまうたんまり、たんまりでうはうはだよ！楽しみでしようがないよ！！」

？「本当かいな？こりや確かに楽しみじゃな。」

？「二人で協力してぶんどっちゃって・・・幸せになるうね？てっちゃん。ハーツハハハハハハハハハ！！」



## 十八話 記憶（後書き）

実は十八話「記憶」は既に先週の時点で8割完成してました。

なぜ遅れたかということちょっと色々ありまして。見方によっては大した事ないだろうっていう人も少ないと思える内容です。

が

実は正直2、3日くらいはこの小説を閉鎖しようか継続すべきか本気で考えてました。うまく言えませんが様々な感情論が湧き上がってました。

その後考えがまとまることなく、度重なるバイト・・・etcに揉まれ

結果としてはやはり続ける事にしました。いや続けたいというべきですかね。

メタルギアもひぐらしも本当に好きなので。

来年はさらに忙しくなりそうなのですが最後までやり抜く・・・  
・努力をします。（汗）

今回の十八話「記憶」は前回と違って静かな心理描写を中心に打ち込みましたが偶然にして皮肉にもまるで今の自分の心理状態を暗示させるが如くでした。

自分の性格上がかなり直情思考（矛盾に思えけど隠したい事もある）で腹黒いのが嫌で喜怒哀楽が激しいからかもしれない。

勿論小説の内容とは異なるけど。

ただ鬼隠しの時の圭一の気持ち部分的ではあるけども何となくわかるかな。葛藤みたいなのも含め。

次回はスネークと羽入が部活メンバーと・・・

十九話 部活（前書き）

新年あけましておめでとございませす！m（  
（  
m

更新遅れました。

とりあえず今年もよろしく！

## 十九話 部活

カランカラン

校長が鳴らすベルの音がする。

5月30日火曜日

午後2時半

今日は朝からドタバタの連続だった。

嫌な夢は見るし、レナに鼻血をふかせてしまうし、スネークは目を怪我をしていて違う意味で驚いたり。

更に梨花ちゃんの親戚の古手羽入という女の子が転校してくる。

何故だか角が生えているが可愛い女の子だった。自己紹介が終わった後、羽入はクラスの男子から質問攻めだった。早速目を付け始める男の子も少なくないという感じだった。

・・・無論、レナがかあいいモードになり羽入を幾度となく拉致をしたのは言うまでもない。手足を縛って動けないようしてもすぐに自力で解いてしまう。かあいいモードの彼女には何をしても歯が立たない。レナよ、朝から何回興奮すれば気がすむんだ。

そんなこんなでドタバタしながら放課後を迎える。

圭「レナ、大丈夫かよ」

レナ「う、うん・・・なんとか。部活はできるよ」

レナはあまりにも覚醒しすぎていた為に昼食が終わって昼休み、羽入を追っている最中に倒れる。五時間目はずっと保健室にいた。

圭「あんまり無理すんなよ？」

魅音「圭ちゃん人の心配してる場合なの？最近負けてばかりでいつも罰ゲーム受けてるよね」

魅音はにやけながら嫌みつたらしくいう。

梨花「レナ。今日も圭一が負ければ素敵なコスプレショーが拝めまです。にばー」

レナ「やるやる！！レナ頑張っちゃう！！！！」

レナはいきなり元気を取り戻す。

圭「ああもうつるせえ！！今日こそ勝ってお前らを罰ゲームに参加させてやる！！」

ガラガラ

スネークが教室に入ってくる。

スネーク「なにやってるんだ？お前たち。」

圭「スネーク！今から部活をやるんだ！！」

スネーク「部活？何部だ」

圭「部活は部活だよ。」

スネーク「いやだから部活でも色々あるだろ」

魅音「え〜我が部は複雑化する社会に対応すべく様々な」

梨花「つまりみんなでゲームして遊ぶ部活なのです。にぱー」

梨花ちゃんが遮るように簡単に説明した。

沙都子「でもただのお遊びだとかかかってきたら痛い目にあいますわ  
！」

魅音「そうそうやるからには命をかけてこないとね〜」

スネークは一通り話を聞くや何か考え込んでる。

スネーク（命をかける・・・か）

やがて口が開き

スネーク「・・・面白い。おれも参加できるか？」

圭一「お！スネークも部活メンバーに入るのか！？」

スネーク「いや俺は大人だし、正式に入るつもりはないが、ちょっとしたおまけで・・・」

魅音「水臭い事いわないの！年齢問わないよ！」

圭一「スネークなら大歓迎だぜ！！」

スネーク「そ、そうか。ありがとう・・・ところで」

圭一「？」

スネーク「まだ入りたがってるやつがいるぞ」

全員が「え・・・」と驚いた表情をする。

スネークは後ろに振り向きやがて、やや大きめの声で

スネーク「なあ、羽入！？」

全員「！」

ガラガラ

羽入は静かに教室に入ってくる。同時に何人がレナを抑える。

羽入「ぼ、僕も部活に混じりたいです・・・」

魅音「今日は珍しく命知らずが沢山くるね？」

~~~~~

圭一「今日は何やるんだ？」

魅音「今日は定番のジジぬきでいこう！！」

圭一「OK！スネーク、羽入はルールはわかるか！？」
二人は頷く。

圭一（フッフ、初心者が二人。今日は罰ゲームは免れそうだ・・・）

部活メンバーが使っているカードは使い古したもののなのでなにがどのカードかわかる。魅音たち程ではないが圭一も何となくはカードの分別がつく。

魅音「それじゃ始めるよ！！」

（一時間後）

圭一「な・・・」

魅音「う、嘘でしょ。」
レナ「あり得ないかな？かな？」

沙都子「わ、私たちがおされていますわ！？」

9回戦までやって

一番はなんとスネークだった。

圭「ちょよ、ちょっとまってなんで新入部員がああ！！勝てるハズがない！！嘘だああ！！」

スネーク「使い古しでカードにクセがあるのは一回戦の時感じてはいた。そしてみんなそれらを暗記しているのも一回戦の戦いぶりを感じた。」

全員「！」

スネーク「よくできた戦いだった・・・だがあまりに出来すぎた。その戦いが仇となったな。」

魅「え・・・」

スネーク「本来ジジぬきのようなカードゲームは運試しにちかい。しかしみな戦いをみるにあまり都合の良い展開ばかりになってる気がする。まるで相手が何のカードがわかるかのように・・・その時にわかった。この部活の戦い方がな」

スネーク「当然一回戦は俺がビリ。その時お前らは新入部員に対しての油断がますます増える。何もわかってないとな。だが俺は一回戦で多少のカードを暗記した。・・・後はお前らの顔の表情とかで大体何のカードがあるのか直感だけで見抜いていった。油断してるお前らにはわからなかったらうがな」

す、凄すぎる。部活メンバーが率直な感想だ。まさか肉体だけでなくこんなところまでとは。

ちなみにビリは羽入と圭一が争ってる。

魅音「はは〜ん、おじさんみくびつていたよ。」

レナ「スネーク先生は本当に無敵だよ。だよ」

梨花「でも羽入はビリ寸前なのです。にばー」

羽入「あうあう・・・」

圭一「ち、ちくしょー！！最後は絶対に勝つ！！」

〜100回戦終了〜

結局一番はスネークだった。俺は部活入部初日は最後にカードに折り目などつけて偽装して勝ったがスネークは暗記と相手の表情と直感のみで勝った。一体なんだこの差は！？

まあ十回戦で勝とうが負けようが俺がビリなものには変わりはない。羽入は最後の最後で魅音から余計な助言をもらい俺が負けてしまっ。

そして今日俺はメイド服で下校になる。

スネーク「お前たちに初めてあったときになぜ変質者のような格好していたのかは罰ゲームに理由があったのか」

圭「ち、ちくしょー！！ズルい！ズルいぞおおお！！新入部員の分際で！！！」

スネーク「ハハハ。でもオヤジのメイド姿よりもお前の方がマシだと思っぞ？まあ俺は死んでもあんな格好したくないがな」

魅「でもスネーク先生がきてたあの変態スーツの方が危ないような・・・」

スネーク「・・・変態スーツじゃない。スニークスーツだ。」

沙都子「でもビックにーにーが着てたスーツは格好良かったですわ」

スネーク「・・・」

勝者のスネークは言われたい放題だ。

梨花「それではみんな帰りましょうなのです。」

圭「スネークなんだかんだ楽しかったぜ！次こそ罰ゲームに合わしてやるからな！」

スネーク「やれるもんならな！」

スネークは学校に残り雑務を行う。
スネーク（・・・雷電のスーツが格好いいか。皮肉なもんだな。あいつ大丈夫だろうか？中毒症状起こしてなければいいが）

（エンジェルモート）

雷電「すまない店長。今日は早めに帰る」

店長「ああわかったよ。」

詩音「店長、雷電さんどうしたんですか？」

店長「彼はああ見えて持病を持ってるらしいんだ。」

詩音「・・・持病？」

店長「3、4日に一辺位に治療にいつてるらしい。そうはいつても実際には不定期らしいが」

詩「体強いしそんなふうに見えませんがね。」

（更衣室）

雷電「ぐふ・・・早くホワイトブラッドの透析を・・・！」

ガチャ

誰かが入ってくる。

詩音「大丈夫ですか？ビック哲史くん」

雷電「お、おい詩音。ここは男子更衣室だぞ」

詩音「・・・！」

詩音は雷電の裸姿（上半身のみ裸）は気にしていない。それよりもあることに気づいた。

詩音「・・・その体は」

雷電「！」

雷電は幼い頃から戦場に身を投じている。雷電体は全身が傷だらけだった。

雷電「・・・あんまり気にするな」

詩音「持病の方は大丈夫ですか？」

雷電「大丈夫う！？・・・」

雷電はよろめく。

雷電「すまない。大丈夫じゃないみたいだ。」

葛西「どうしましたか詩音さん」

葛西はこの店の総支配人。エンジェルモート食べにきていたが様子

がおかしいため更衣室に来た。

詩音「葛西！この人を入江診療所まで車で」

雷電「そ、その必要はない！自宅にいかないとできない治療があるんだ……」

詩音「え……？診療所だとダメなのですか？」

雷電「ああ。だから……う！」

雷電はふらついた体で着替えを済ませる。

葛西「雷電さん」

雷電「？」

葛西「診療所に用がなければ家まで送りますか？どのみちその体で雑見沢にかえるのは無茶ですよ」

雷電「……」

（車中）

結局詩音もついてきた。

雷電「……すまない」

葛西「これくらい容易いですよ」

詩音「ビック哲史くん。聞きたい事があります。」

雷電「？」

詩音「あなたは一体何者ですか？葛西に初めてあうのに全然びびらないし・・・あと持病って？それに体のあの無数の傷跡は！？」

雷電「・・・」

詩音「答えてよ・・・」

葛西「詩音さん」

詩音「何よ葛西！」

葛西「他人の私生活や過去にはあまり干渉しないのが仁義ってもんです。」

詩「でも・・・」

雷電「・・・」

詩「・・・そうだ。今度分校にいくときスネークさんにきいてみるか。」

十九話 部活（後書き）

スネークの名言

スネーク「リキッドオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

・・・洗剤や化粧水などにあるリキッドっていう商品名を見かけるたびに反応してしまうのは僕だけでしょうか？

それはさておき今年からさらに更新が不定期になるといいましたが・・・ここで発表があります。

・・・といたいたいです活動報告で確認してください。すいません

m ((m

活動報告は今日中に更新するので。(^^ゞ

二十話 白昼の決闘（前書き）

ども。気がついたらアクセスが四万いってました。ありがとうございます
います m ((m

お気に入り登録も更新していない間にも増えていて驚きました。

二十話 白昼の決闘

6月1日

午前11時30分四限目

クラスみんなは今グラウンドにいる。体育の時間だ。

スネーク「これから体育を始める！」

魅音「今日は何やるんですか？」

スネーク「今日は・・・水鉄砲大会だ！」

全員「!?!」

圭「お！あれをやるのか！」

スネーク「先週の体育は自由はやらせたがそこにいる部活メンバーが水鉄砲をやっているのを見ただろう。俺もみていたら血脇肉踊つてな。今回はクラス全員でチームに分けて戦う。」

全員「オオオオオオオオ!!」

スネーク「ちなみに俺もいるぞ」

全員「!!!!」

富田「スネーク先生のチームが断然有利じゃないですか！」

スネーク「大丈夫だ。ハンデありで俺と一緒にいるチームは二人だけとする」

岡村「ということはスネーク先生のチームは二人で戦うということですか？」

スネーク「そうだ」

圭「おいおい大丈夫かよ。いくら元軍人だからって」

スネーク「お前らこそ俺を撃てるのか？」

魅音「随分なめられたもんだね・・・いいよ！あたしたち部活メンバーの本気、みしてやるうじゃない！」

沙都子「私のトラップに勝てますかしら？」

レナ「レナもスネーク先生を罰ゲームに参加させてメイド姿拝めるように頑張っちゃおうよ！」

全員「・・・（そ、それはいやだな）」

詩音「・・・（あたしもなんとか勝って雷電さんの真相をききだそう）」

一時間目の休み時間の時はなしだった。

）

詩音「はろろくん！スネーク先生」

詩音が職員室に入る。

スネーク「お、遊びにきたのか」

詩音「はい！今日はよろしくお願いします！ところで・・・」

スネーク「なんだ？」

詩音「ビック悟史くんについて聞いた事が・・・彼は一体何者なんですか」

スネーク「何が言いたい？」

詩音「あの人は園崎組の幹部を見てもびびらないし、あの体でなぜか持病持ちみたいだし、それに・・・見ちゃったんです。無数の傷跡を」

スネーク「それをしてどうする？お前は何か得するのか？」

詩音「べ、別に・・・。ただなんとなく」

スネーク「お前には悟史という彼氏がいるのだろう？いくら似てるからって別の男に興味を持つのは良くないな」

詩音「・・・！！何言ってるの！！あたしは悟史くん一筋よ！！ふざけんな！！！！」

詩音が凄い見幕で怒る

スネーク「！」

普段の一見乙女チックな詩音から想像もしにくい見幕だったためスネークもさすがに驚く。

やがて詩音は下を向いて小さく咳く。

詩音「・・・それにまだつきあってるわけじゃ・・・。彼は今、行方不明なんです。」

悪い事をきいたな。

さすがにスネークも多少罪悪感を感じた。

スネーク「・・・そうか、すまないな。」

詩音「別にビツク悟史くんが好きとかそういうのじゃなくて、なんか彼はどことなく悪い意味でも悟史くんと、私とも似てる感じがして・・・。悟史くんも私も家柄の事で色々複雑な事情を抱えてるの。そのせいで私がどれだけ苦労したか」

スネーク「それが雷電とどう関係する？」

詩音「だって・・・普通あんな傷だらけな体しなんでしょう？人間とは思えない位強いし、そのくせ持病って・・・。」

スネーク「それをしたら詩音はどうしたいんだ？雷電を慰めたりでもするのか？それとも傷の舐めあいでもするのか？」

詩音「・・・！せ、先生には関係ないじゃないですか！」

スネーク「関係ないなら俺が教える必要もない。」

詩音「・・・く!」

スネーク「それとあまりビクッていうあだ名は俺の目の前で言うのは止めてくれないか？」

詩音「え、何で・・・」

チリンチリン

鐘がなる。スネークは立ち上がり職員室を出始める。

スネーク「お前には関係ないと言ったる」

詩音「待つてください・・・!!」

詩音がスネークの肩を掴む。スネークは振り返らず答える。

スネーク「・・・四限目に体育の時間がある。」

詩音「それがどうか？」

スネーク「今日は水鉄砲大会をやる。お前のチームが最後まで生き残ったら答えを教えてやる!・・・俺の事も雷電の事もな」

詩音「・・・え」

ガラガラ、ピシヤン

スネークはドアを閉める。

〃

詩音「なんとしても生き残って答えを・・・梨花ちゃま!頑張りましょう。」

梨花「はいなのです。にぱー」

チームはスネークが事前に決めていた。

スネークチームはスネークと圭一

あとは魅音チームは魅音、詩音、梨花、岡村、富田・・・etc

レナチームはレナ、沙都子、羽入、・・・etc

以上の3グループとなっている。

スネーク「チーム事に参加したらまずバラバラに広がってくれ。少ししたら校長がベルを鳴らしてくれるよう頼んでおいた。」

魅音チームは校門前においてある丸太置き場付近に。

レナチームは体育倉庫付近に

スネークチームは校舎裏付近に

そしてベルが鳴る。

カランカラン

圭一「どうするんだスネーク？」

スネーク「ひとまず体育倉庫にいるレナたちを片付ける。」

圭一「なぜレナ達から？」

スネーク「あのチームには沙都子がいるだろ？おそらくあつちにはトランプでも仕掛けてる準備をしてるに違いない。」

圭一「そのスキを狙って襲う訳か」

スネーク「ああ。しかし相手だつてバカじゃない。必ずその周りには警備をおいてるはずだ。俺たちが警備と魅音チームに手こずっている間は何かしら準備しているハズだ。・・・そこでこれを使う。」

圭一「？」

スネークが指を指したのはマンホールだった。

スネーク「このマンホールは体育倉庫までつながってる」

圭一「ま、まさか下水道を通つて？」

スネーク「ああ、だが心配するな。圭一はいく必要はない」

圭一「ふう、下水道なんて歩きたくないぜ。」

スネーク「そのかわりにやってもらいたい事がある。」

スネークはそう言つて圭一にメモ用紙にセロテープを渡す。

メモにはなにか英語？ローマ字で書いた文章がある。

圭一「……これは？」

スネーク「だめだ！その文章をよんではならない！」

圭一は声を殺し黙読するやなんとなく意味が分かった。

圭一「……でこれを？」

スネーク「こいつに貼っつける。その後は……」

レナチーム

沙都子「それでは私はトラップをしかけてますは」

レナ「それじゃレナ達は警備をしているね」

沙都子の今回のトラップはまずは落とし穴だった。とはいえ時間もないから浅く掘り、足を引っ掛ける程度のトラップだが。また屋根の上にも警備部隊とバスケットボールを持っている部隊がいる。ボールをぶつけて妨害するきだ。下では警備部隊とその裏にテニスボールや野球ボールをカゴに大量に持った妨害部隊がいる。これで走って向かってくる相手をこけさせるつもりだ。

沙都子においては時間が許され限りトラップをドンドン仕掛けていくつもりだ。

沙都子「オーツホホホ！私たちのチームの鉄壁の要塞には絶対勝てません事よ！攻撃面でも圭一さんと同等に張り合ったレナさんがいますわよ！」

はなから見れば確かに向かう所敵なしだった。

これが凡人相手ならの話なら。

警備隊「ん？なんだあれ？」

校舎裏からドラム缶二個転がってくる。

レナ「きつとスネーク先生と圭一君だよ。スネーク先生はドラム缶が好きっていつてたし」

そして警備部隊は警戒態勢になる。ドラム缶は体育倉庫前で止まる。しかしドラム缶から誰も出てこない。警備部隊はドラム缶を覗く。

警備隊「何も無い？」

レナ「あれ何か貼ってあるよ？」

レナ達は転がってきたドラム缶の中にあるメモ用紙を取る。

警備隊「メモ？」

レナ「なんだろう？だろう？」

文章は英語？でなくローマ字で書いてあるものだ。レナはメモを読み上げる。

レナ「ええとなになに『天に向かい・・・』」

レナたちは上を向きながらメモを朗読した。

メモの内容

「tennimukaisakebe, Curry, mazui,
kimoi, Konoyonomonotohahomoe nai」

一応略

天に向かい叫べ、カレー不味い、キモイ、この世の物とは思えない。

250

レナ「……(。°。)」

警備部隊「……あ」

その場にいた者はようやく気づいた。いま言うてはいけない発言に。

沙都子「あ、あ、ああああ……」

トラップを仕掛けていた沙都子もみるみる顔が青くなる。

その時だった。

ガタガタ、ガタン

マンホールから音がする。

マンホールから現れたのはスネークだった。そして既に何人か水鉄砲で撃たれている。

警備部隊「うわ！」

咄然とした空気の中にいきなりスネークが現れたためみんな警戒を怠っていた。スネークは容赦なくレナチームを襲う。

沙都子「きゃあああ！」

沙都子もさっきのことで気が動転していたのか逃げ初めていたが自ら作ったトラップにはまりこけている。

そしてスネークはそれを逃さない。

沙都子「あ！・・・」

沙都子の体操服は水鉄砲により濡れた。

警備隊「クソ！」

警備部隊は攻撃を仕掛ける。

警備部隊「！？」

しかし攻撃をくらったのはリタイアした沙都子だった。

スネークは沙都子をつかんで身代わりをしていた。

警備隊「お、女の子を身代わりにするなんて最低ですよ!」

スネーク「戦場では油断は許されない。・・・油断したものから消えていく」

スネークは顔はまっすぐ向いたまま上に向かって攻撃する。上で何人かリタイアされる。

警備隊「!」

スネークはその後に沙都子を強めに投げ離れた。

警備隊「沙都子ちゃん危ない!」

男の隊員が沙都子をキャッチすると同時に倒れる。

いまの状況を説明すると沙都子が馬乗りになり男の隊員は下いる。つまり抱きついてるに近い状況となっている。

警備隊「(ぼ、僕が、あの沙都子ちゃんとこんなに状況に・・・えへへ)」

ピシャ

にやけているのもつかの間に顔面を水鉄砲で攻撃される。

スネーク「性欲を持て余す。・・・だがお前らには早すぎる」

言い終わらないうちにスネークは周りにいる沙都子を助け???よう

としていた警備隊を攻撃する。警戒を怠り顔がにやけた男の警備部隊を一気に壊滅させていく。

ちなみにスネークはその周りにいた警備隊員全員に股関節に攻撃をした。

まるでおしつこを漏らしたみたいで恥ずかしさこの上ない。

警備隊「食らえ！」

屋根の上で生き残った警備部隊がボールで攻撃する。

スネーク「所詮小学生が投げる球だ」

警備隊「え・・・」

スネークに全てかわされた。そして一気に屋根まで登り屋根からスネークは顔をだす。

警備隊「いまだ！」

警備隊が一齐にボールをスネークの顔面や手にぶつける。

普通ならこの時点でリタイアするが相手は伝説の傭兵。

スネークはなりふり構わず登り完全に屋根の上まに立つ。

警備隊「う、嘘だ！！なんで!？」

その後もボールをぶつけるが歯が立たず。CQCを使い一気に一人の警備隊員を捕まえる。

警備隊「があー!!」

ボールの嵐がスネークのかわりに食らう。スネークが警備隊員を盾にしたからだ。ボールの他にも水鉄砲部隊が攻撃するが水は身代わりにされてる警備隊員が喰らう。

~~~~~

その応用を繰り返したスネークは、屋根の上の部隊を全滅させた。

下の部隊「く、くそう!」

下の部隊員は体育倉庫を囲みしたから水鉄砲を構えた。

下の部隊「今度こそ終わりですよ!先生!」

スネーク「……いや、終わりなのはお前らだ」

下の部隊「え……」

スネーク「何かわすれてないか?」

そう。先ほどレナチームはある恐ろしいことを言ってしまった。

隊員は後ろを恐る恐る振り向く。

そこには鬼のような表情を浮かべた知恵がいた。

知恵「……先ほどカレーの悪口が聞こえたのですが、誰でしょうか?」

隊員「いや、気のせいだ・・・」

知恵「誰でしょうね！！！」

隊員「ビクッ！！！」

スネーク「こいつらがいつてたぞ知恵先生」

隊員「！！！」

まあ、間違っではないが。言わせたのはスネーク側だ。しかし今の知恵にはそんな声は聞こえるはずもなく。

知恵「許しません！！！！！」

隊員「うわああああ！！！」

隊員は一斉に逃げ出す。何も考えずただ恐怖から逃れる為に必死に走る。リタイアしてる者まで走る。

魅音「お、なんか奇襲してきたよ」

梨花「奇襲というより何かに恐怖し逃げている風にしか見えないのです。」

詩音「いくしかありませんわお姉！」

気が動転しているレナチームは為すすべはなくただ無情にも魅音チームに次々と倒されていく。しかしこの特効作戦（！？）が全く無駄という訳ではなく、魅音チームにもおおきなダメージが残った。そしてここにレナチームの事実上完全崩壊が見えた。



ただ一部を除いて・・・

「スネークがレナチームを全滅仕掛ける少し前の話し」

「うわあああ！！」

「助けてええ！！！」

圭一「よしよし！作戦成功だ。」

圭一はスネークからマンホールに入って二分後にDMT作戦（ドラム缶・メモ用紙・知恵作戦）を実行を命じられる。そして今まさに成功している。

圭一「しかしこれからどうしようか・・・」

スネークは体育倉庫の屋根の上で逃走中のレナチームを狙撃している。今からスネークの応戦したいが鬼の知恵がいるのであらぬ誤解をうけられそうので近寄りたくない。

圭一が腕を組み次の行動を考えていた。その時だった。

圭一「！」

何かとんでくる。圭一は間髪よける。そこにいたのはレナだった。

レナ「さすがだね圭一くん。レナの攻撃をよけるなんて。」

圭一「レナ！生きてたのか！？」

レナ「知恵先生がくる前に羽入ちゃんと逃げてきたんだ」

圭一「羽入はどこに!?!」

レナ「教えてあげないよ」

そういつてレナは圭一に攻撃する。

圭一「うわわ!」

レナ「圭一くん、この間は相打ちで勝負つかなかったよね?今度こそ決着つけようね?」

圭一「面白いじゃねえか、望むところだああ!」

↳そのころスネークは

スネーク「よし!後は羽入とレナだけだ。」

上側からスネークが、前からは魅音チーム、・・・うしろからは知恵が襲っていた(? ) 為にレナチームは完全に機能を停止している。

スネーク「しかしどこにいるんだ?」

羽入「僕はここです」

スネーク「!?!」

羽入が後ろにいる。

スネーク「・・・いつの間！」

スネークは攻撃する。しかし

スネーク「何！バカな！！！」

水が当たらない。羽入の体をすり抜ける。

スネーク「まさかお前」

羽入「あうあう 姿をけしているのです。」

本来梨花以外見えるはずがないのだがスネークには何故が見えてしまう。しかし実体化してはいないため水はすり抜けてしまう。

スネーク「こんな時だけ神の力とやらを使うとはな」

羽入「さあ、観念するのです。」

スネーク「ち・・・！」

作戦を立て直す必要があるか

スネークはひとまず屋根から降りようとした。

その時だった。

羽入「う！あう！？あう！！！」

いきなり羽入がジタバタともがき始める。まるでフォックスダイに

でも感染してしまった様子だ。  
一体奴の身に何が起きた!?

羽入「か、辛いのでしゅ!辛いのでしゅ!」

辛い?

スネークは理解できずにいた。ふと下を見ると梨花がいた。梨花はどこから持ってきたの何故かキムチを食べている。

羽入「り、梨花ああ!や、やめてほしいのでしゅ!」

梨花「羽入。あんたがリタイアすれば後はレナだけなのよ。降参しなさい。さもなければ……」

もしかもしゃ

梨花はさらにキムチを食べる。

やがて降参したのか、羽入が実体化を宣言する。実体化した羽入をスネークは始末する。

羽入「はうっ……」

スネーク「……」

本当にこれがオヤシロ様なのだろうか?スネークは哀れみな表情を浮かべる。

スネーク「あとはレナだけだが、お前らもなんとかしないとな。」

水鉄砲を構えた。

梨花「僕はもうやられてしまったのです。」

梨花の体操服を見るとすでに濡れていた。

梨花「ただとすぐに魅音達がきますですよ にばー」

ふと屋根から眺めると魅音達がすぐ近くまできていた。

魅音「あ、スネーク先生あんな所に！」

スネーク「……マズい、もう水の量がすくない。誰かのを奪わないと。」

詩音「その必要はありませんよ。」

スネーク「！」

後ろを振り向くと詩音がいた。しかし詩音は水鉄砲を持ってない。

詩音「大丈夫ですよ 私は攻撃しませんから」

スネーク「……」

しかしスネークは警戒を怠らない。やがて詩音はスネークにちかづいてスネークの左手を握りしめる。

スネーク「……何をする気だ」

詩音「ちょっとしたサービスですよ」

詩音はスネークの左手を自らの胸を押し当てようとする。

スネーク「……止めておけ。お前の左手に持つてるスタンガンは分かっている。」

詩音「……ち！」

詩音は一步後ろにさがる。どうしようかと詩音は悩む。その時だった。

スネーク「……いいだろう」

詩音「え？」

スネーク「俺にスタンガンを当ててみる。もしお前が俺を気絶させたらお前らの勝ちだ。俺は何もしない。」

そういつてスネークは水鉄砲を下に投げる。これでスネークは丸腰だ。

この男はバカか？

詩音は呆れかえっている。いくら超人だからってスタンガンに耐えられる訳がない。まして詩音のスタンガンは改造を施しているため、かなり強化されてる。

詩音「上等じゃん……ぶちまけられてえかあああ！……！」



詩音「ま、参りました・・・」

スネーク「詩音。悪いがスタンガンを借りるぞ」

詩音「え？」

そういつてスタンガンを詩音から取り上げる。

魅音「スネーク先生観念しな！」

魅音達はどこからか脚立を持ってきたのか屋根に登り始める。魅音は下から屋根にヒョッコリ顔をだす。

その瞬間

バチチチ！

魅音「え？」

魅音はスタンガンを喰らい脚立から倒れ始める。

魅音チーム「うわあああ」

後ろにいる魅音チームもドミノ倒しのように倒れる。

富田「魅音さん！」

岡村「危ない！」

魅音は倒れるがだれかがクッションとなってケガはしていないようだ。

助けたのは岡村だった。



ここでデジャブが起きる。岡村は支えきれず倒れる。そして魅音の下敷きになる。

ちなみに岡村の顔面には魅音の胸が当たっている。

岡村「!」

富田「岡村!ず、ズルいぞ!」

他の男子「そうだ、そうだ!俺もパフパフ!」

ピシヤ!

富田「あ!」

油断している内に魅音チームはスネークから攻撃を喰らう。

その後は屋根から降りてCQCを使い、レナチームにもやっていた応用で一気に倒していく。

こうして魅音チームは全滅する事になる。

スネーク「どいつもこいつも性欲を持って余しすぎだ」

魅音チーム女子「(・・・男って本当馬鹿)」

くその頃圭一達く

圭一「はあはあ、レナやるな」

レナ「はあはあ、圭一くんこそ。「レナと圭一の勝負はまだまだについていなかった。」

圭一「なあ、レナ。互いに残りの弾も少ないしここはあの勝負で決着をつけよう」

レナ「いいよ。レナも同じ考えだったし」  
やがてスネークたちが来る。

スネーク「圭一！ここにいたのか。」

圭一「スネーク！ちょうど良かった。審判やってくれないか」

最初は何を言い出すんだと思った。しかしすぐにわかる。レナと圭一が相手の反対方向を向いている。西部劇などにあるガンマン対決をする気だ。

スネーク「・・・わかった」

詩音「いいんですか？今ならレナさんに攻撃できるのに」

魅音「互いの真剣勝負に水を差し手はならないよ。KYだよ詩音」  
先ほどまで気絶していた魅音が言う。

詩音「・・・お姉だけに言われたくないです。」

スネーク「それじゃいくぞ！・・・1」

圭一とレナが一步、歩み始める。

スネーク「2」

互いに神経を集中させる。

スネーク「3」

そして互いに後ろを振り向き銃を向ける。

そして勝負の決着が今決まる。

勝者は圭一だった。

圭一「や、やったああ!!!」

スネーク「やったな圭一！」

パチン!

スネークと圭一はタッチする。

レナ「はうとう負けちゃった・・・」

こうして水鉄砲大会が終わりを向かえた・・・ハズだった。

スネーク「!」

いきなりスネークは横にローリングする。

圭一「おい!スネークに梨花ちゃんどうした?」

スネークがローリングした理由は梨花がスネークを攻撃したからだ。



こんどこそ決着がつく。

そして授業の終わりを知らせるベルになる。

ひぐらしのなく頃に

## 二十話 白昼の決闘（後書き）

知ってる人も多いと思いますが、部活メンバーでの活動はうらやましい程に平和を謳歌している風に見えますが、いつもその後の異変や行動に何かしら関連していますよね？

今回の「白昼の決闘」も今後の物語と何かしら関連すると思います。

後は、メタルギアシリーズのお得意の展開なども想像するかもしれませんが、先が読めるかもしれません。（もちろん絶対に読めないと自信ある展開も用意してるけど）

## 二十一話 揺らぐ心（前書き）

「またせたな！」

1ヶ月間、教習所をクリアしたり、テスト勉強したり、実習の準備だったり色々やってみました。

今は実習中ですがある程度、身も心も落ち着いたので投稿しました。まあ実際やる気になればすぐにでなくともそれなりに更新できるんですがね。

ただ長く小説を野放しにしとくと話しのキレが悪くて悪くて。

結局投稿するにしても何度かやり直しましたが後遺症が隠しきれない。かなり時間がかかりました。

心に余裕をもつのは大変です。

## 二十一話 揺らぐ心

6月4日 土曜日

午前12時

今部活メンバーとスネークはエンジェルモートにいる。

先日体育の時間でビリだったレナチームのレナと沙都子は今エンジェルモートでメイド服を着て罰ゲームを受けている。

沙都子「ま、まさか二週連続で罰ゲームとは・・・私も災難ですわ」

魅「はい、はい文句言わない！罰ゲームは部活の必須事項だよ！」

詩「そうですねよ沙都子。私なんて罰ゲームでなくても着なければならぬのですから。」

詩音は今はお昼休憩中で圭一達という。メイド服のままです。

オタクコン「いや〜いつみても目の包容だね。」

スネーク「・・・性欲を持って余す」

スネークは店員（特に詩音の胸元）をジロジロと見る

魅「・・・スネーク先生、前から気になってたけどその表現はどう



解釈すればいいの？」

オタクコン「あまり気にしない方がいいよ」

梨花「男の子はこわいこわい狼さんなのです。にぱー」

だまれ狸

スネークは小さく呟く

圭「しかし罰ゲームはいいけど・・・」

レナ「ハア、ハア沙都子ちゃんに詩ちゃんカワイイよお、お持ち帰りしたい」

全員「・・・」

レナは今圭一達の座っているテーブルで一緒にいる。

ロープで拘束されて

レナも1日沙都子と罰ゲームでメイド店員になるはずだったがレナは鼻血を噴きかぁいいモードになり仕事どころではなくなってしまうた。

ちなみに羽入は食べる事に夢中で話にすらならない。

スネーク「だれかなんとかしるレナを」

圭一「俺に任せろ」

圭一は小さく呟く

圭一「でも・・・俺はそんなレナをお持ち帰りしたいぜ」

レナ「え！ええええええ！？圭一！？どういう意味かな？かな！？」

レナは顔を真っ赤にさせる。やがて圭一はレナの頭をなで始める

圭一「レナを俺が独り占めしたいぜ」

ボン！

レナは気絶する。鼻血を噴きながら。

魅「な、なんか圭ちゃんホストみたい・・・」

詩音「お姉、今つらやましいと思ったでしょう？」

魅「な、ななな、なに言ってるのさ！？あ、あたしはべ、別に別に・・・」

今度は魅音が顔を真っ赤にさせる。

スネーク「全く・・・度し難い奴らだ」

オタクコン「スネーク、差し手が増しいようだけどそれ、君がいえたことかい？」

スネーク「・・・ほっとけ」

雷電「スネーク達もきてたのか」

雷電が昼休憩で執事の格好で現れる

オタクン「おお、雷電似合ってるじゃないか」

スネーク「お前はそっちの仕事の方が向いてるかもな」

雷電「・・・。ところでレナはどうしたんだ？」

スネーク「ああ、圭一が悪ふざけをしてな」

圭一「お、おいスネークが始めに言ったんだろ。」

スネーク「何も気絶させるとまでは言っていない」

数分後

レナ「ふえ、んん・・・」

圭一「レナ大丈夫か？」

レナ「圭一くん？あれレナはどうしたんだろうっ？だろっ？」

圭一は自分の後頭部に手をあてて目線をそらす。

圭一「まあ、そのなんだ気にするな！ははは・・・」

レナ「・・・？うん」

その時だった

カランカラン

店員「いらっしやいませ」

なにやら水商売風の若い女が現れる

リナ「あら、レナちゃんじゃない？。どうも」

レナ「あ、リ、リナさん・・・こんにちは」

レナは何故か下を向いて急にテンションが下がる。

スネーク「・・・？」

リナ「今日はみんなと一緒に楽しそうね？。あれ？そこにいるのは噂の新しく来た先生？」

レナ「はい。スネーク先生です。」

リナ「あら？どうもお世話になってます。リナです。」

スネーク「あ、ああ」

リナ「やだ先生男前じゃない。結構タイプよ」

スネーク「それは、どうも」

やがてリナはケーキを買い始める。

リナ「また今度遊びにくるからねレナちゃん。」

レナ「は、はい・・・」

リナは帰っていった。

スネーク「・・・」

（帰り道）

午後2時

今部活メンバーとスネークとオタコンはバイトを終えた雷電とともに帰っている。詩音だけバイトで残る。

圭一「それにしてもまたやりたいな。水鉄砲大会」

先日盛り上がった水鉄砲大会を思い出しながら圭一は語る。

魅音「あのさうちに射撃場があるんだけどやらない？もちろん部活としてだけど」

レナ「え！そ、それってもしかして・・・」

沙都子「本物ですよ!？」

魅「そうだよ!おじさん、時々練習するからさ、みんなとやってみたくて。」

沙都子「でも明らかに魅音さんや詩音さん、スネーク先生とビックにーが有利じゃないですよ!？」

魅「部活第十九条!勝つためにはあらゆる手段を用いても構わない。」

沙都子「なりふり構わなすぎてしてよ」

レナ「でもなんか面白そうだよ!だよ!やろうよ!ね、圭一くん?」

レナは圭一に顔を向ける。

圭一「・・・」

レナ「圭一くん・・・?」

圭一（本物の射撃・・・だと?）

圭一はなにか悪い事でも起きたかのように顔色を悪くしていく。

魅「圭ちゃん?どうしたの」

サトコ「圭一さん大丈夫ですよ?」

圭一の頭の中にはモデルガンで大怪我をさせた少女の姿を思いだしていた。

圭一（モデルガン・・・本物の射撃・・・）

スネーク「しつかりしろ」

バン!

圭一「!」

スネークは両手で圭一の肩を叩く。

圭一「ああ……わりいわりい。や、やるつぜ射撃!面白そつじやん!」

声は明るいが目が笑っていない圭一。

魅「圭ちゃん……大丈夫?」

圭一「ははは、大丈夫大丈夫。」

レナ「……」

~~~~~

スネーク「あ」

魅「どうしたの先生?」

スネーク「すまないみんな忘れ物をした。先に行つててくれ。」

全員「?」

魅「？。わかった。」

スネークとオタコンを除く全員が雞見沢に帰る。

オタコン「どうしたんだい？」

スネーク「エンジェルモートにな靴を。梨花からもらった書類が入ってる。」

オタコン「書類・・・あれの事かい？」

〈回想（エンジェルモートの中）〉

梨花と羽入、スネークとオタコンは早めについていた。それには訳があつた。

スネーク「んで？俺たちに見せたい者とは？」

梨花「これです。」

梨花は一冊のA4ノートを渡される。タイトルに「100年の惨劇」と書いてある。

スネーク「これはいつたい？」

羽入「それは僕達が体験してきた難見沢での惨劇、難見沢の黒歴史が詳しくかかれています梨花と僕が作りましたレポートなのです。」

羽入はモグモグと巨大パフェを食べながらスネークたちに教える。

スネーク「こんなのを俺たちにわたしてどうする？」梨花「毎回訪れる惨劇は色んなパターンがきまっているという事は教えたわよね？でも私も全てを教えた訳じゃない。このレポートをよんでこれから何が起きるか予測してもらいたいの。」

ペラ

スネークとオタコンはレポートをなにげに読む。

オタコン「いいのかい？こんな大事なものをもらってしまって」

梨花「ええ、一応コピーはしたから大丈夫よ。」

スネーク「・・・！これは！？」

スネークは何か気になる記事を発見する。

梨花「どうしたの！？」

スネークが見ていたのは圭一が過去に東京で発砲事件を起こした記事だった。

スネーク「やはりか」

スネークは先日に見た雑誌の内容を思い出す。

梨花「……しっていたの？」

スネーク「なんとなく。以前にオタクンとみた雑誌の内容と酷似してるからな。」

オタクン「まさか圭一がこんな……」

スネーク「人は一つや二つ位、黒歴史なんてのあるものだ。俺たちだって例外ではないだろ？」

オタクン「ああ、分かっている。」

オタクンは人差し指と中指をメガネの真ん中のフレームに当てる。

雷電は窓ガラスを眺めて過去を振りかえる。

梨花「……」

羽入「一応このレポートはあくまでこれまでの例なのです。まれに全く違う展開もおきますです」

梨花「所詮、私たちが記憶に残っているものをまとめた程度のもの。予測できないのもあるから気をつけて。あと誰が見られないように」

スネーク「わかった。恩に着る。」

そういつてスネークは鞆にノートをしまう。

梨花「ところで」

スネーク「なんだ？」

梨花「その紙袋は何かしら」

オタク「スーツだよ。さっきスネークと一緒に買い物をしたんだ。」

スネーク「圭一たちが来る前にトイレでこれに着替える」

梨花「なぜ今頃そんな事？」

スネーク「さすがに大の大人がこの格好で町中を歩くのはどうかと思っただけ」

スネークは今上下スポーツジャージを来ている。

羽入「・・・スネークだとジャージでも違和感ないのです」

~~~~回想終了~~~~

雷電「まさか圭一が犯人とは。しかもあのレナまで」

スネークとオタクと雷電は今エンジェルモートの前まできている。

スネーク「レナは俺も驚いた。まあたまに妙なオーラを放つ時もあったがな」

ガラン

店に入る。

オタコン「しかしめずらしいねスネークが忘れ物なんて」

スネーク「寝不足でな。（昨日夜中久しぶりに成人向け雑誌を読んで・・・）」

オタコン「・・・今、変な事考えてなかった？」

スネーク「・・・いや。」そういいながらスネークは自分がいた席の周りを見渡す。

スネーク「・・・？ない。」

オタコン「え？」

スネーク「ないどころにも。」

店長「それならさつき詩音ちゃんが預かっていたよ。」

店長がうしろから現れる。

スネーク「そうか、盗まれずにすんだ。」

店長「今は休憩室にいるよ。厨房の奥の部屋に休憩室があるから勝手に入ってついていいよ。」

スネーク「すまない」

（休憩室）

ガチャ

スネーク「詩音すまないな」

詩「は、ははひ！……つてす、す、スネーク、先生！？」なぜかかなり驚いた表情を様子だ。後ろに何かを隠してるようだ。

オタコン「さつき僕達がすわってた席にあるノートを預かってるって聞いたんだけど」

詩「あ、あああ、こ、これですね！は、はい。」

詩音はノートを返す。

スネーク「すまないな」

スネーク達は帰る。

詩音

店長「詩音ちゃんどうしたの？ひどく沈んだ顔して。」

詩音「わ！て、店長！？」

店長「休憩は終わりだよ」

詩音「は、はい今いきます！」

詩音

く帰り道く

スネーク「……」

オタコン「どうしたの スネーク？ だまりこんじゃって。」

スネーク「いや……べつに」スネーク（見られてなければいいが・  
……）

その時だった。

？「なんじゃとボケが！ わしの言うことが聞けんのか！？」

男「す、すいません！ 勘弁してください……」

裏路地でどうやら一悶着しているみたいだ。

？「ボケが！！」

金髪の柄の悪い奴が男を殴りつけようとしている。

雷電「危ない！」

雷電が止めに入ろうとする。

スネーク「まで。あのジャパニーズマフィアの様子をよくみる」

雷電「？」

柄の悪い奴は男の胸ぐら掴んだまま殴ろうとしない。それどころか、何故か涙目になっている。

? 「なんでわしはいつもこんな人生ばかりなんじゃ」

男「へ？」

? 「なんでこんな役ばかり・・・」

男「？」

? 「う、う、あああああああ!」

男「ひ!？」

スネーク「やめておけ」

ガシッ

? 「!？」

スネークは柄の悪い男の拳をとめる。

? 「なんじゃおんどれは・・・ウッ!」

ズキン

スネーク「どうした？」

いきなり柄の悪い男は頭を抱え始める。

？（こいつ・・・どこかしてみた！？）

雷電「？」

？「チ、チキシヨー！離さんかボケ！」

そういつて柄の悪い男は逃げていった。

男「なんだかよくわからないけど助かりました。」

男は礼を言う。

スネーク「気にするな。それよりあの男は一体？」

その時だった。いきなりスネークたちの目の前に肥満気味の初老を迎えた男が現れる。

？「彼の名は北条鉄平。まあ見ての通りたちの悪いヤクザです。」

スネーク「あんたは？」

大石「おっと自己紹介が遅れました。私は興宮警察署で刑事をやっている大石と申します。いやーヒーローにでもなるうとおもいましたが、こりゃ一本とられましたわ。」

スネーク「・・・警察か」

大石「そうポリ公ですよ。それよりそのあなた。危なかったですねー。」

男「ええ、お陰様で九死に一生を得ました。」



スネーク「借金なんか借りるからあんな目にあうんだぞ。」

男「いえ、借金はもう返済しました。・・・かなり強引な方法でしたが。」

スネーク「じゃあ、何故おそわれた？」

男「最近変な組織とつるんでいて、私も彼に楽に金が貰えるからその組織に入らないか説得されてるんです。私は断ってるんですがしつこくて・・・」

スネーク「逃げてる所を襲われたのか」

男「はい。ただ最近彼の様子が変なんです」

スネーク「変？」

男「急に優しくなったり、以前よりも凶暴になったり、黙りこんだり・・・」

大石「裏業界に手を染めすぎて精神が鬱状態なんでしょうかね？」

スネーク「まるでコンバットハイだな。・・・わかった気をつけるよ」

男「はい。本当に有り難うございます。」

大石「それでは私も仕事が仰山残ってますのでこれで失礼します。」

男と大石は帰る。

雷電「変なマフィアもいるもんだな」

スネーク「……あのマフィア。どこかで見かけたような」

二十一話 揺らぐ心（後書き）

やっと大石が参上しました。

さていよいよ物語も中盤にさしかかります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7041i/>

---

メタルギアとひぐらしのなく頃に「蛇助け編」

2010年10月13日15時36分発行